

斐川町埋蔵文化財調査報告3

平野遺跡群発掘調査報告書 I

1983年3月

島根県斐川町教育委員会

斐川町埋蔵文化財調査報告3

# 平野遺跡群発掘調査報告書 I

1983年3月

島根県斐川町教育委員会

## 発刊のことば

このたび、大手企業である株式会社村田製作所が当斐川町の平野丘陵をその工場用地として誘致されることになりました。

この平野丘陵には古墳等の埋蔵文化財が数多く存在しておりますが、今回調査を行った平野遺跡群もその一つであります。

発掘調査では多くの資料を得ることができましたが、とりわけ横穴墓群では古墳時代後期における出雲平野の動向を窺うことのできるものが多数ありました。

また、平野問塙、高射砲陣地跡は新しい時期の遺構ではありますが、これらは地域の歴史を刻んだ文化財であり、おろそかにできないと考え、その構造を記録することにいたしました。

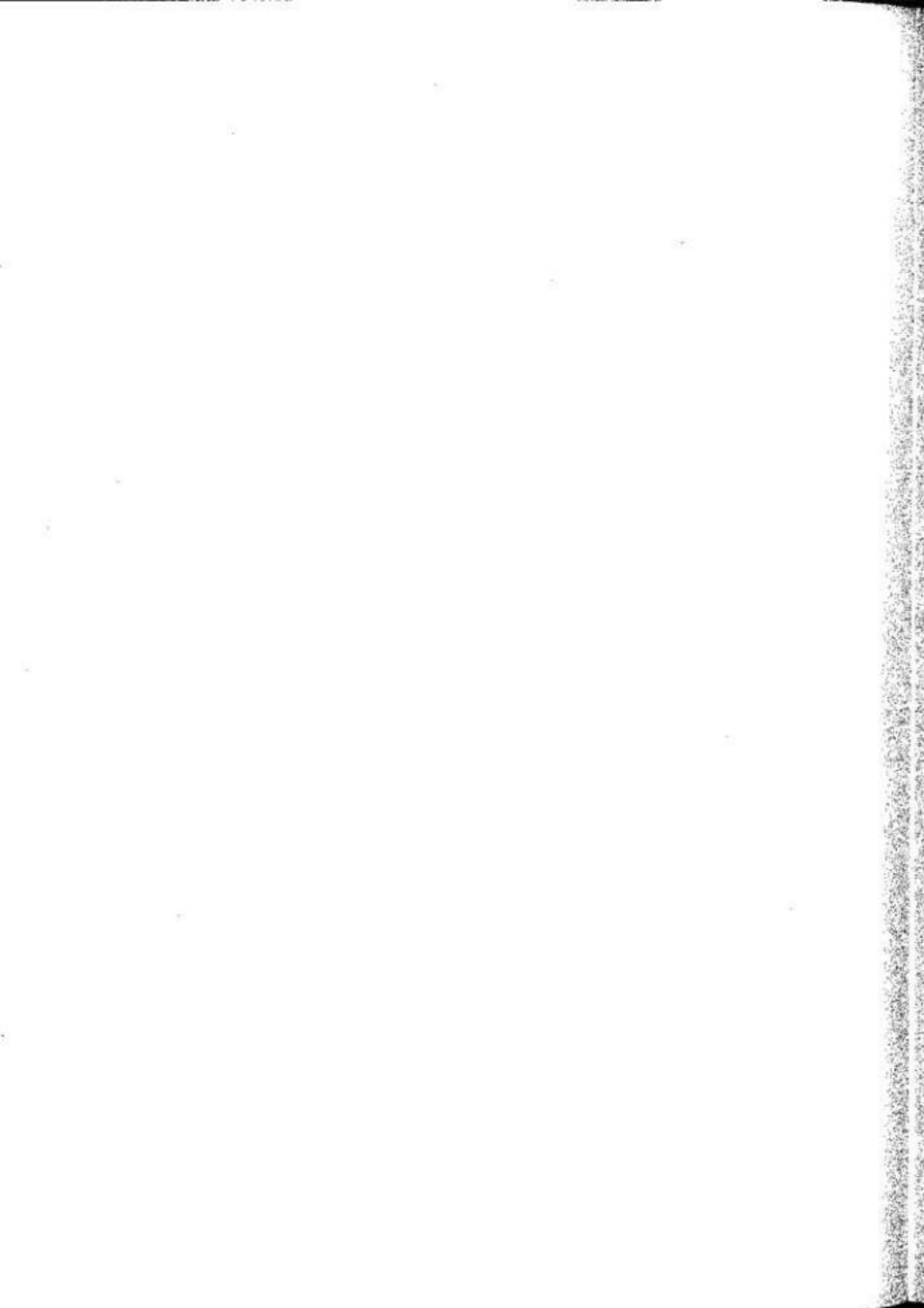
本書が広く御活用頂ければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり終始御指導下さいました島根県教育委員会をはじめ関係者の皆様に衷心より御礼申し上げます。

1983年3月

斐川町教育委員会

教育長 古川 喜志夫



## 例　　言

1. 本書は斐川町教育委員会が株式会社村田製作所(本社・京都府長岡京市)からの受託事業として実施した平野遺跡群(籠川郡斐川町大字上平江字平野2,045番地他)の発掘調査の報告である。
2. 調査は昭和57年7月12日から昭和58年3月31日まで実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査指導　勝部 昭(鳥取県教育委員会文化課埋蔵文化財第1係長)

西尼克己(　　"　主事)

調査員　宍道年弘(斐川町教育委員会嘱託)

調査補助員　桑原貞治・大畠裕貴・長兄康弘

今岡一三・谷沢 仁・荒木利幸

萩 雅人・原 広人・妹尾美典

事務局　多々納弘(斐川町教育委員会昭和57年課長)

新宮義忠(　　"　昭和58年課長)

金築 崑(　　"　社会教育課主事)

4. 調査にあたっては村田製作所、斐川町役場開発課および地元各位の協力・援助があった。
5. 本書の執筆はⅠ章を金築、Ⅱ章を西尾、Ⅲ・Ⅳ章を宍道がそれぞれ分担した。人骨鑑定については、鳥取大学医学部(法医学教室)井上晃孝助教授に依頼した。また、図版製作は金築、宍道、桑原で行った。なお、実測図の方針は調査時における磁北である。
6. 出土遺物は斐川町教育委員会で保管している。

## 目 次

I 調査にいたる経緯 .....	1
II 遺跡の位置と歴史的環境 .....	2
III 平野遺跡群の概要 .....	5
1. 平野西支群の概要 .....	9
(1) 1号横穴墓 .....	9
(2) 2号横穴墓 .....	10
(3) 3号横穴墓 .....	13
(4) 4号横穴墓 .....	14
(5) 5号横穴墓 .....	16
(6) 6号横穴墓 .....	19
(7) 7号横穴墓 .....	20
(8) 出土遺物 .....	24
2. 平野高射砲陣地の調査 .....	26
3. 平野間櫓 .....	26
IV まとめ .....	29
V 出土人骨鑑定 .....	30

## 挿 図 目 次

発掘作業風景（写真）	1
図1 平野遺跡と周辺の遺跡	3
図2 平野遺跡群全体図	6
図3 西文群横穴墓配置図	7～8
図4 1号横穴墓実測図	11
図5 2号横穴墓実測図	12
図6 3号横穴墓実測図	15
図7 4号横穴墓実測図	17
図8 5号横穴墓実測図	18
図9 6号横穴墓実測図	22
図10 7号横穴墓実測図	23
図11 平野7号高射砲陣地実測図	27
図12 平野間植略図	28
図13 6号横穴墓人骨出土状況	31
図14 7号横穴墓人骨出土状況	35

## 図 版 目 次

- 1～5 遺物実測図
- 6～16 土器観察表
- 17 平野遺跡群周辺の航空写真及び平野横穴墓西支群近景
- 18 1号横穴墓 美門閉塞状況及び前景
- 19 2号横穴墓 玄室堆積土層及び前景
- 20 3号横穴墓 遺構検出状況及び前庭部
- 21 4号横穴墓 遺構検出状況及び前景
- 22 5号横穴墓 美道堆積土層及び遺物出土状況
- 23 6号横穴墓 前庭堆積土層及び美門閉塞状況
- 24 6号横穴墓 人骨及び遺物出土状況
- 25 7号横穴墓 美門閉塞状況及び前景
- 26 7号横穴墓 人骨出土状況及び人骨
- 27 7号横穴墓 玄室加工状況
- 28 第7号高射砲陣地
- 29 平野間櫓
- 30～34 遺物写真

## I. 調査にいたる経緯

昭和48年、斐川町大字上直江（平野丘陵）に株式会社住友電工が進出を予定し、用地買収を行なったものの、事情により断念せざるを得なくなった。

その後、誘致企業を探した結果、関西の大手企業である株式会社村田製作所が元住友電工予定地であった平野丘陵に進出することとなった。しかしながら、経営規模の関係上用地不足となり、昭和57年4月より追加買収が行なわれ、同年7月22日に進出の公式発表が行われた。

そして、これに伴い埋蔵文化財の有無が問題になってきた。当該地周辺には三角点古墳をはじめとする遺跡が存在していたため、島根県教育委員会に依頼し昭和56年6月2日に分布調査（調査者…文化課 松本岩雄主事）を実施した。その結果、円墳、高射砲陣地跡等が確認され、更には横穴墓が存在する可能性があったため関係者と協議のうえ、昭和57年7月12日より昭和58年3月5日まで現地調査を実施した。



調査風景

## II. 遺跡の位置と歴史的環境

平野遺跡群は島根県簸川郡斐川町大字上直江字平野に所在する。この平野一帯は、山陰最大の穀倉地帯である出雲平野の東部にあたり、斐川町のはば中央部に位置している。

本遺跡群は標高約90mの洪積層から成る低丘陵に存在し、北側には山陰本線と国道9号線が走り、更にその前面には築地松で著名な散村風景が展開する。一方、南側には『出雲国風土記』(733年作成)に載る山雲郡の神名火山とされる標高366mの仏経山が併せて、この平野丘陵も仏経山から派生する支丘の一つであるが、町の中央部を東へ貫通する新川庵地(1832~1940年)によって切断され、現在では独立丘陵となっている。さて、平野丘陵のある上直江地区には、平野遺跡群をはじめ、岩野原古墳(18mの円墳・箱形石棺・鉄劍2)、三角点古墳(墳丘不明・箱形石棺)、狼山遺跡、劍山横穴墓、コモゴ山横穴墓群、龜山横穴墓、狼山城跡等多くの遺跡が存在する。以下、これらの遺跡を含め、町内の古代の概要を記述する。

縄文時代から弥生時代にかけての土器を伴う遺跡は発見されていないが、平野丘陵から石鎚・石槍が、上学頭の永徳寺周辺や三船の波知神社付近の水田より石斧が、また、羽根地区から石鎚が採集されており、沖積地に面する低丘陵一帯が居住地域になっていたことを示している。

弥生時代後期から古墳時代前期の大規模な遺跡としては、平野丘陵から西方3kmの地点にある斐伊川鉄橋遺跡が挙げられる。この遺跡は、昭和37年に行われた山陰本線の鉄橋架け替え工事中に発見されたもので、地表下7mの土層から弥生土器および土師器が多く出土している。これは仏経山北麓に広がる沖積平野一帯にも多くの集落遺跡が地表下に埋没していることを示唆する有力な資料である。また、平野丘陵と隣接する狼山からは壺棺とみられる土師器が発見されている。さらに、それと同時期の土師器が出西沢田や平野の丘陵からも表採されているが、その遺跡の性格は詳かでない。

斐川町内の古墳・横穴墓は、南部の丘陵を中心に50数か所が知られている。なかでも、神庭・直江・出西の3地区に密集しており、この地域が古墳時代に入って本格的に開発されたことを示している。

中期に属する大形の古墳は、神庭岩船山古墳(全長57mの前方後円墳・舟形石棺)、軍原古墳(墳丘不明・長持形石棺・長刀4、勾玉2、管玉18、櫛6、クモ貝製貝輪2、鐵鎚若干)、小丸子山古墳(径35mの円墳・礎床・直刀)があり、いずれも斐川町東部(奈良時代の簸部郷に当る)に所在し、当時この地域を支配した強大な首長が台頭したことを物語るものである。後期の大形古墳としては、平野丘陵の東南約2kmの地点に所在する出西丸子古墳(墳丘不明・全長7mの横穴式石室・子持須恵器)がある。この石室は玄室の奥



図1 平野遺跡と周辺の遺跡

壁、天井石が各1枚、側壁が数枚の切石で構成されたいわゆる石棺式石室と呼ばれるものに属する。また、玄室と羨道との境界にある閉塞石の表面には、穴道湖周辺部で5例発見されている「十」状の陽刻が施されており、それらの古墳との関連が注目される。さらに小形で石棺式石室の形態をとる建部西古墳、出西後谷古墳、插雲寺山古墳もこの地域を代表する後期古墳といえよう。

一方、横穴墓は13か所で確認されている。現在判明している限り、その分布には偏りが認められ、仏経山南麓の斐伊川流域と山西丸子古墳の周辺および本遺跡群の所在する上直江一帯に集中している。大倉横穴墓群（6穴・家形・須恵器）、御射山横穴墓群（3穴・カマボコ形・直刀・刀子・鉄鎌・須恵器）、平野東横穴墓群（12穴・カマボコ形・テント形・勾玉・金環・刀子・須恵器・土師器）、平野西横穴墓群（17穴・カマボコ形・金環・馬具・直刀・刀子・鉄鎌・須恵器・土師器）、劍山横穴墓群（2穴・須恵器）、コモゴ山横穴墓（1穴・家形）、亀山横穴墓（1穴・須恵器）、沢田横穴墓（1穴・須恵器）、八幡宮横穴墓（1穴・九天井・須恵器）、青木勝四郎宅西横穴墓群（2穴）、海の平横穴墓（3穴）、岩海横穴墓群（4穴・家形）、墓田横穴墓群（4穴）。以上の横穴墓の玄室は家形、カマボコ形、テント形と様々な形態を呈している。このことは、斐伊川をはさんで西側の神戸川流域には妻入整正家形が密集しているのと好対照をなしており、同じ出雲平野にも地域色をみることができる。しかし、羨道と玄室との関係は、出雲西部に多い妻入り形式のものが圧倒的である。時期は山陰須恵器編年Ⅳ期初めに該当するものが大半であり、7世紀前半に作られたものと推定される。この様に、斐川町の古墳文化は後期後半に至って一時に開花したといえるが、極めて短期間のものであった。

律令時代には、平野一帯は、出雲郡漆治郷に属し、出西に置かれた出雲郡家の所在した出雲郷の東側に隣接していた。奈良時代の史料として有名な『正倉院文書』の「天平十一年出雲國職給歷名帳」（739年）によると、同郷に深江里・工田里・犬上里の三つの里名が存在していたが、上直江がどの里に当るかは定かでない。同帳によれば、漆治郷にはさまざまな氏を名のる30人の戸主が記載されており、複雑な氏構成であったことが窺える。また、臣・首・君の姓をもつ者と郷のみの者とに分かれた身分構成が認められ、8世紀の村落構造を知る上で手掛りとなるであろう。

しかし、その後の平安時代前後の史料は全く存在せず、文永8年（1271）の『千家文書』に漆治郷の記事が現われるまでは、空白の時代であった。

### III. 平野遺跡群の概要

平野遺跡群は、丘陵上にある7基の古墳と10基の高射砲陣地跡、および丘陵斜面で確認された2群の横穴墓と間塁1所で構成されている。

古墳と高射砲陣地跡は、昭和56年6月2日の島根県教育委員会と斐川町教育委員会の分布調査によって確認されたものである。それによると、1号墳は径13m、高さ1.5m余りの円墳で、東向斜面から須恵器が出土している。2号墳は径9.5m、高さ1.2mの円墳で、墳頂の西半分は山道によって削平されている。3号墳は径12m、高さ1mの円墳で、墳頂の東半分と南半分は、山道と高射砲陣地によって削平されている。5号墳は径7.5m、高さ0.5mの円墳で、墳頂は地山が露出している。なお、4号墳については、今回の調査区域内にあたるため調査を行ったが、古墳に伴う遺構及び遺物は検出されなかった。

また、高射砲陣地については、調査区域内にあたる6～8号砲台跡を調査した。これらを調査する目的については、高射砲陣地の立地が古墳の築造にも適する場所であることを想定した上で、それらが古墳の上、もしくは古墳を破壊して造られたのではないかと考えられたからである。しかし、調査の結果、古墳に伴う遺構または遺物の検出はなく、縦横断面の上層でも確認し得なかった。また、周辺斜面の踏査及びグリッド掘りの調査でも、遺物等の発見はなかった。砲台跡については後述する。

今回の調査で最も主眼をおいたのは、丘陵の内側に面した標高7～15m間の斜面の調査であった。従来、丘陵の外側に面した斜面においては、剣山・コモゴ山・亀山などの横穴墓群が知られていたが、内側に面した斜面においては、全く知られていなかった。従って調査方法は5×5m～5×10mのグリッドを任意に30か所設定し、遺構面の確認と遺物の発見に努めることとした。

その結果、第3、5、9、10、29、30グリッドにおいて、須恵器の蓋坏、鏡片等が1～3片検出された。しかし、遺構は皆無であることや、出土した遺物が表土や流れ込みの土に含まれていたため、調査区域外つまり上から流れ込んだものと判断した。

一方、第4、第6グリッドからは、黒色土層あるいは地山（真砂土）崩壊土に集中して須恵器片が含まれていたため、グリッドを左右に拡大し遺構検出を行った。その結果、第4グリッドで5基の、第6グリッドで7基の横穴墓を確認し、調査することができた。以下便用上第4グリッドに存在する横穴墓の一群を東支群、第6グリッドに存在する横穴墓の一群を西支群と呼称し、両支群の各横穴墓の概要を記すこととする。

なお、東支群については、昭和58年度に調査範囲を拡大するため、更に横穴墓の増加が見込まれている。横穴墓は大なり小なり群で構成されている性格上、2年度分を合わせて検討する必要がある。従って、東支群の報告は次回の調査報告書で述べることとする。

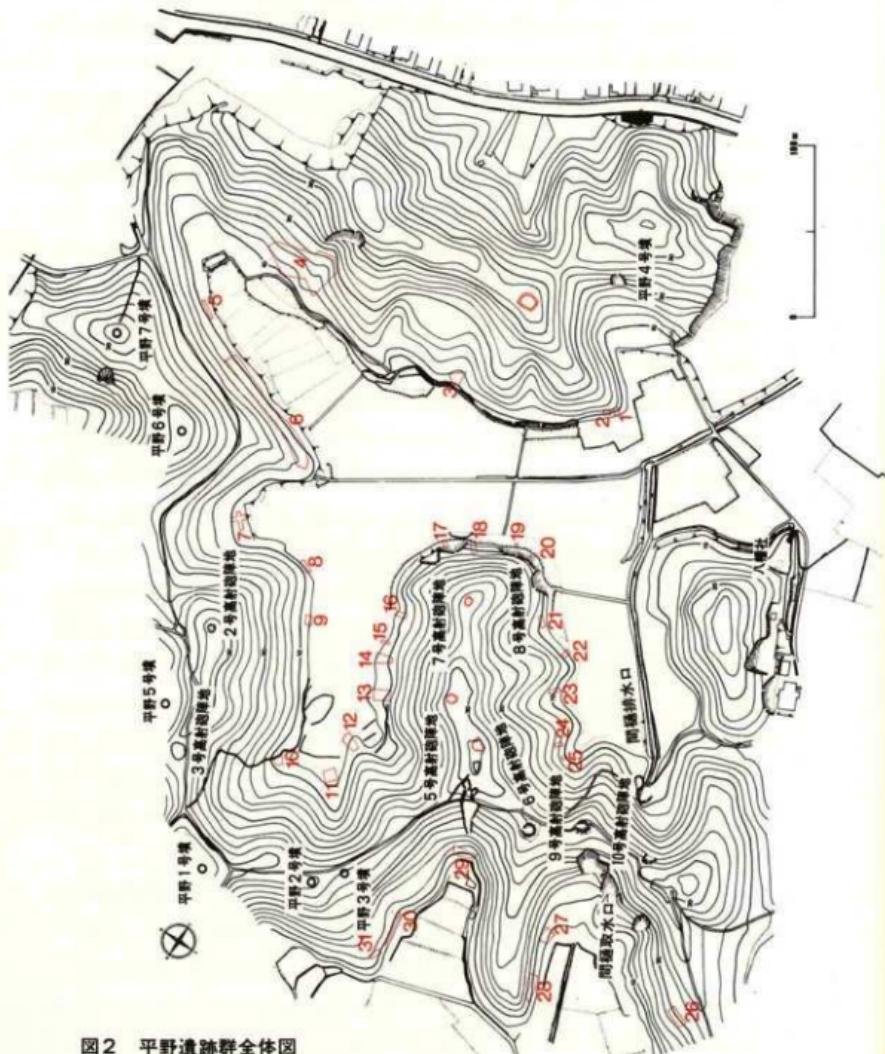
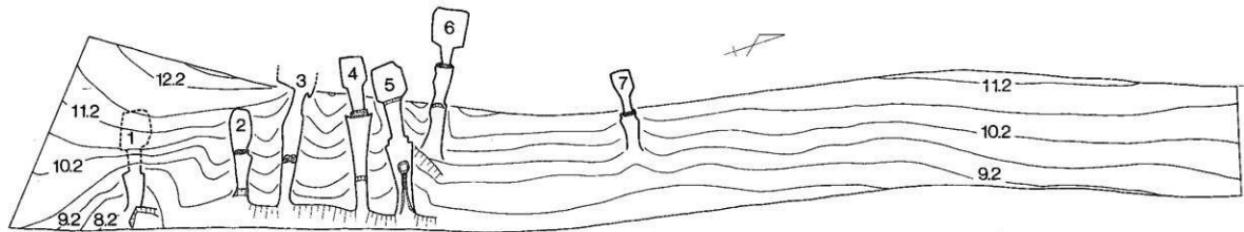
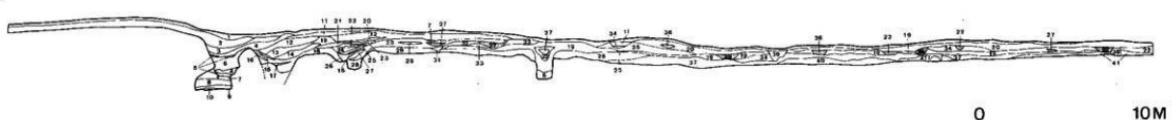


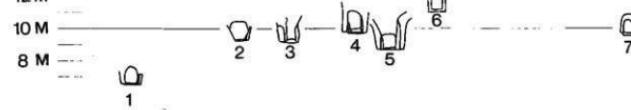
図2 平野遺跡群全体図



15M —



12M —



- |                |                     |                      |                     |
|----------------|---------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 表 土         | 11. 時青色土            | 21. 明赤褐色土(少ブロック含む)   | 31. 喜賀褐色土(ブロック少量含む) |
| 2. 明赤色土(少砂粒含む) | 12. 黄褐色土(少ブロック少量含む) | 22. 黄褐色土(少ブロック多量に含む) | 32. 淡黄褐色土( # 多量に含む) |
| 3. 灰茶色土        | 13. 青色土( # 多量に含む)   | 23. 淡赤褐色土( # 含む)     | 33. 黄色土             |
| 4. 法茶色土        | 14. 喜茶色土( # 含む)     | 24. 喜茶色土( # )        | 34. 明赤褐色土(中ブロック含む)  |
| 5. 白青色土        | 15. 喜茶色土( # )       | 25. 淡灰土( # )         | 35. 淡赤褐色土(ブロック少量含む) |
| 6. 清青色土        | 16. 茶色土             | 26. 淡褐色土(アスギ出土)      | 36. 喜茶色粘質土          |
| 7. 黄茶色土        | 17. 茶色土(ブロック含む)     | 27. 黄色土( # )         | 37. 淡灰              |
| 8. 灰茶色土(スニキ出土) | 18. 茶色土             | 28. 灰茶色土             |                     |
| 9. 基礎地土        | 19. 黄褐色土(ブロック少量含む)  | 29. 喜茶色粘質土(ブロック少量含む) | 38. 明赤褐色粘質土(ブロック含む) |
| 10. 明赤褐色土      | 20. 喜茶色土(少ブロック少量含む) | 30. 明褐色土             | 39. ( # 含む)         |

図3 西支群横穴墓配置図

## 1. 平野西支群の概要

西支群は、馬蹄形の谷が南へ開いた起伏の少ない西側斜面に立地し、調査した7穴は、いずれも標高7~12mの比較的緩傾斜面に穿たれている。横穴墓は南端のものから順次1号横穴墓、2号横穴墓とし、北端のものを7号横穴墓と呼ぶこととする。この西支群において、南限は1号横穴墓であるが、北限は未調査である。しかし、西壁断面において6号横穴墓と7号横穴墓の間に2穴、7号横穴墓の北側に8穴を確認できる。従って、西支群は17穴前後の横穴墓で構成されているといえよう。

### (1) 1号横穴墓

本横穴墓は、西支群の中では最も南側に位置し、東向きに開口している。澳門部分の標高は7.5mで、今回調査した7穴の横穴墓の中では、最も低いところにある。表土を剥いだ時点で、玄家の天井が丸く陥没し、前庭の一部も擾乱されていることを確認した。

玄家の平面プランは、奥行き228cm、横幅は奥行き付近で160cm、入口付近で154cmを測り、中央でやや胴張りのある隅丸長方形を呈する。奥壁は100cmまでは外傾するが、側壁は140cmまでは内傾してたちあがる。天井の形態は崩壊しているため明らかでない。玄門の形態は渾沌ながら左右対称ではなく、右側前壁がやや長くのびている。床面は入口付近でU字形に掘られているが、本来はここに段がつき、玄室と羨道との境界になると思われる。

羨道は長さ140cm、幅は玄室の入口で90cm、澳門で80cmを測り、玄室に近づくにつれて僅かながら広がる形状を呈する。天井は大半が崩壊しているが、比較的保存状態の良い部分の高さは80cmを測るので、それに近い数値を示すものであろう。澳門は単純構造を呈し、閉塞施設は認められない。

前庭は長さ210cmと比較的短かく、幅は80~132cmを測り、壁は外傾する。前庭入口部分で高い段をもつ。

堆積した土層は、前庭部分については黄色真砂土の上に黒色土層が整然と堆積していた。羨道から玄室にかけては、有機質を含む白黄色土層が床面にみられた以外はすべて大井壁及び側壁の地山崩壊土で覆われていた。

検出された遺物は極く少量で、次のとおりである。

玄室	須恵器	壺1
前庭	須恵器	壺片少數

玄室では壺が唯一の遺物である。壺は蓋壺の壺部で、奥壁寄りに伏せた状態で置かれていた。壺の底部外面はヘラ切りの後、荒いナデ調整を施している。たちあがりは低く、小

形品の割にはやや厚みがある。この形態のものは、本横穴墓群の中では比較的多く出土している。

前庭出土の甕片は、小破片で時期判定の資料になり得るものではなかった。

## (2) 2号横穴墓

本横穴墓は東向きに開口し、羨門部分の標高は10mとなる。南側に位置する1号横穴墓とは、間に突起のたまりをはさんで約5mの間隔がある。横穴墓の上面を検出した時点では、黒色土層内に黄色土層がレンズ状に混入し、既に横穴墓が崩壊したか、あるいは荒されている様子であった。

玄室は盗掘坑が多く旧状を保っていないが復元すると、平面プランは、奥行き186cm、横幅は奥壁付近で114cm、入口付近で120cmを測り、縦長方形を呈するものであろう。奥壁は、湾曲しているが側壁は崩壊しているので、天井の高さは明らかでない。また、盗掘坑は、玄室の南壁に2坑、北壁に1坑、北東隅に1坑が掘り込まれている。

羨道の長さは104cmを測る。横幅は側壁の地山が軟弱で既に崩壊していたり、若干の掘り過ぎのため不整形となっているが、比較的旧状を保っているところでは60cmの幅がある。側壁の高さ及び天井の形態は不明である。羨門は単純構造で床面には閉塞用の板材を嵌め込んだと推定される横溝が検出された。

前庭は長さ212cm、幅は58~88cmを測り、壁は外傾する。前庭人口部分で低い段をもつ。

堆積した土層をみると、玄室から前庭にかけて淡黄色土層、灰黄色土層、暗黄色土層が整然と堆積し、その上に天井壁崩壊土が乗っていた。更に、黒色土層が堆積し、その中から須恵器が数片出土した。

検出された遺物は次のとおりである。

羨道	須恵器	甕片少數
前庭	須恵器	蓋1 壺1 高壺1 甕片少數

前庭出土の蓋は口径12.5cm、高さ5cm、壺は底部を欠くが、口径11.8cmを測り、いずれも比較的大形品に属するものである。高壺も比較的大形とみられるが、口縁部と脚部を大きく欠いている。羨道及び前庭出土の甕片は小破片で、2~3片である。

以上、検出された遺物は堆積土層からのもので、本横穴墓の築造時期と一致させるわけにはいかないであろう。

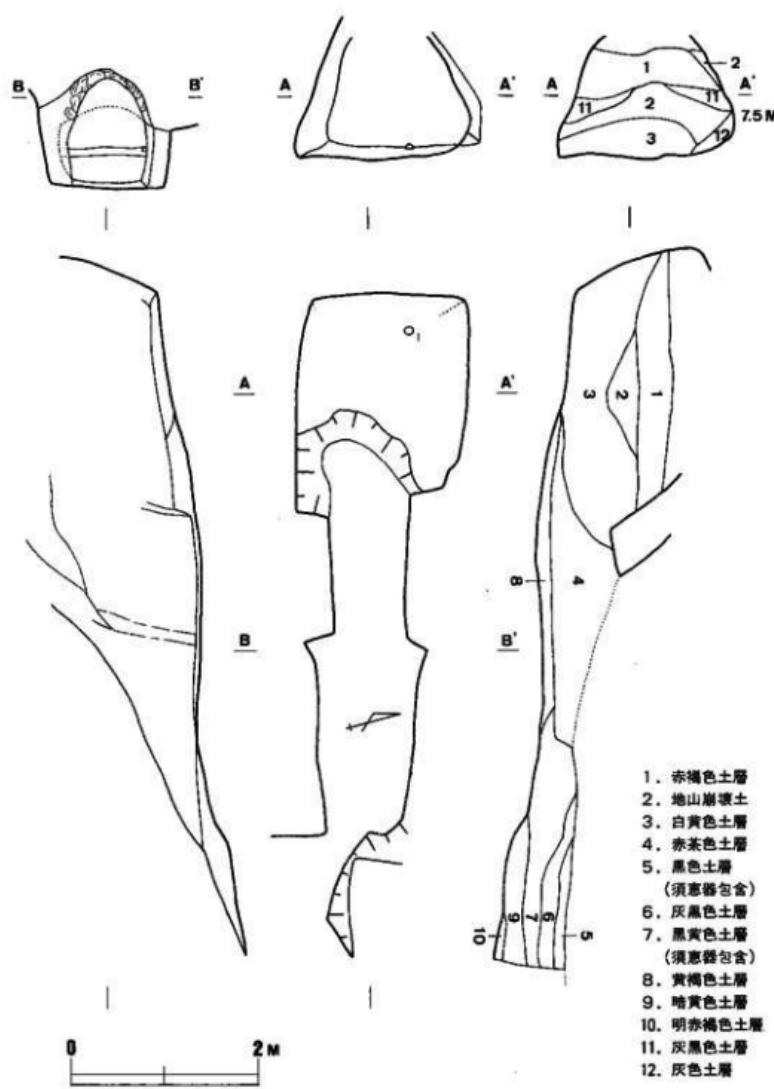


図4 1号横穴墓実測図

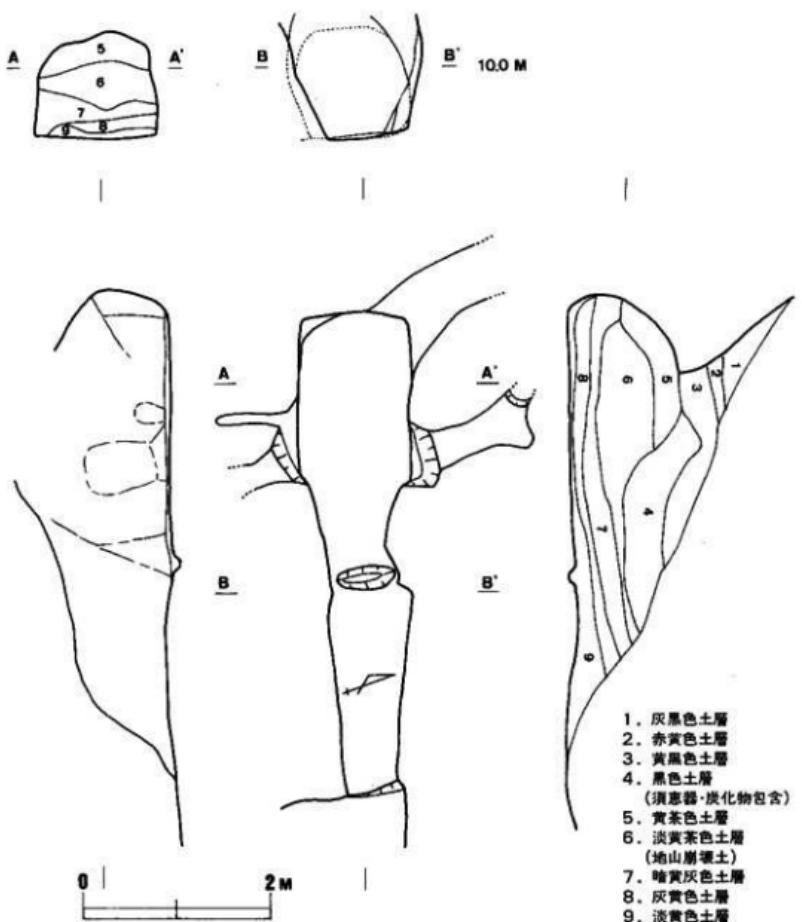


図5 2号横穴墓実測図

### (3) 3号横穴墓

本横穴墓は2号横穴墓の北側に隣接し、東南東に開口している。羨門部分の標高は9.5mである。玄室と羨道は既に崩壊しており、調査は玄室の入口までとした。これは、玄室が調査区域外であった事も一つの原因ではあるが、これ以上掘り進むと天井壁崩壊土と軟弱な地山（真砂土）による崖崩れ等の危険があったため調査を断念したわけである。

調査することのできた玄室入口も、南側が盗掘と思われる穴で大きくなれており、旧状を保ってはいないのであるが、あえて横幅を推定すると214cm前後になる。側壁及び、天井壁の高さは不明である。

羨道は長さ108cm、幅は玄室の入口で84cm、羨門で74cmを測るが、これも原形を保ってはいないので形状を判断することはできない。天井は崩壊しているが、側壁のたちあがり約80cm、羨門の高さが約98cmとなるため、天井の高さはほぼそれに近い数値になるものと思われる。羨門の床面には閉塞用の板材が嵌め込まれていたと思われる横溝が穿っている。羨門構造は、南側壁に少しアクセントがあるものの、盗掘坑の影響とも考えられ判然としない。

前庭は長さ574cm、幅68~114cmを測り、非常に細長く、入口付近でラッパ状に開く形状を呈する。床面は羨門から274cmのところで、落ち込む深い穴が2個検出されたが、用途は不明である。壁は低く外傾する。

堆積した土層についてみると、前庭から羨道にかけて一様に明茶褐色土層が堆積し、その後、前庭では白茶色土層、黄褐色土層の順に、羨道では天井壁崩壊後に黒褐色上層が堆積したものと考えられる。上層から多くの遺物が出土し、とくに黒色上層からは須恵器壺片が集中して出土した。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	壺片少數
前庭	須恵器	蓋2 杯5 高杯1 提瓶1 壺2 横瓶1

玄室出土の壺片は1片で、赤茶色土層からのものである。

前庭出土の蓋は口径13cm前後のものである。杯は口径8.6~9.6cmと小形品に属するものである。高杯は脚部の底径8.9cmと大きいものである。これらは堆積土層から出土したものであるが散乱した状態で出土した。また黒色土層から集中的に壺片が出土した。

壺は復元すると2個体分となるが、胴部下半は欠損している。とくに底部にあたる破片が1片もなかった。このことは、須恵器壺を用いた何らかの墓前祭祀が執り行われたことを示すものであろうか。

横版は脇部の一方を欠き、出土状況からみると竈と同様な使われ方をしているものと考えられる。

#### (4) 4号横穴墓

本横穴墓は3号横穴墓の北側に隣接し、東向きに開口している。奥門部分の標高は10mである。玄室と羨道の天井は既に崩壊しており、調査中にも頻繁に落盤があった。そのため、本来の調査を断念し、危険防止のため調査区域外にもかかわらず、玄室上部の表土から一気に掘り下げる格好となった。

玄室の平面プランは、奥行き334cm、横幅は奥壁付近で148cm、入口付近で136cmを測り、隅丸長方形を呈する。天井の形態は不明であるが、高さは奥壁でやや外傾して134cmまで、側壁でやや内傾して120cmまでたちあがるため、それに近い数値と思われる。床面にみられる三角形の穴は後世の掘乱であろう。玄室人口は両袖式となっている。

羨道は長さ158cm、幅は玄室の入口で98cm、奥門で68cmを倒り、玄室に近づくにつれて広がる形状を呈する。天井は崩壊しているが壁の一部が高さ80cmほど残っているのでその付近で天井に至るものと思われる。奥門は二重構造を呈し、羨道側の床面に閉塞用の板材を嵌め込んだものと思われる横溝が穿ってある。

前庭は長さ116cm、幅は62~158cmを測り、奥門付近でラッパ状に大きく広がる形状を呈する。壁は外傾し、床面は奥門から424cmのところで低い段を有する。

堆積した土層をみると、前庭から玄室にかけて淡黄色土層が薄く堆積した上に、前庭では淡黄茶色土層、茶色土層が堆積し、さらにその上に遺物を多く含む黒色土層が乗っている。一方玄室では、天井壁の崩壊上で全面が覆われていた。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	鉄製品	鐵鍊1
須恵器	蓋2 环2 壺1 提瓶1	
前庭	須恵器	蓋1 环2 壺1 瓢2

玄室出土の遺物はすべて、玄室と羨道を結ぶ中軸線より北側の床面直上からのものである。蓋は奥壁に接し、入れ子式に伏せた状態で出土した。环は奥壁と前壁の中間に上向きに置かれたものと、奥壁際に伏せたものがある。环は口径11.1~11.5cm、蓋は12.5~13.5cmと大形品に属する。

提瓶は环と蓋の中程に口縁部を南に向け横転した状態で出土し、蓋は左前壁際で口縁部を玄室人口に向かって横転した状態で出土した。

鐵鍊は柄のみ現存し、提瓶の後ろに先端を南に向けて置かれていた。

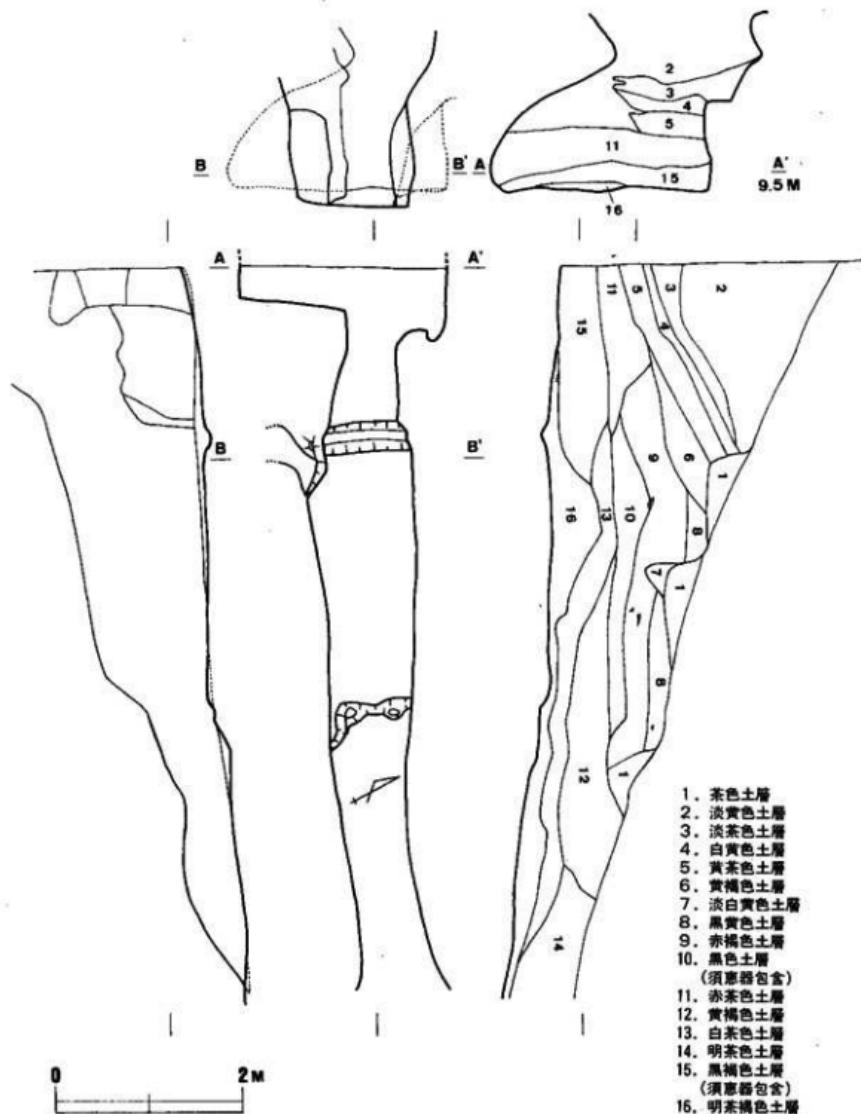


図6 3号横穴墓実測図

前庭出土の蓋と環はいずれも小破片で復元不可能なものである。底は底部のみ、蓋は口縁部のみのものと、頸部のみのものである。これらは主に黑色土層から出土した。

#### (5) 5号横穴墓

本横穴墓は4号横穴墓の北側、幅約60cmのところに位置し、東向きに開口し、主軸も4号横穴墓とはほぼ平行している。羨門部分の標高は9.5mである。3号・4号横穴墓同様、玄室及び羨道は既に崩壊しており、調査中にも頻繁に落盤があった。従って、危険防止のため調査方法の変更を余儀なくされ、充分な調査を行うことはできなかった。

玄室の平面プランは、奥行き240cm、横幅は奥壁付近で174cm、入口付近で190cmを測り、入口部分を底辺とする隅丸のやや台形状を呈する。天井は崩壊し、奥壁及び側壁も至る所が剥離しているために高さは不明である。床面は羨道より若干高く造られている。

羨道は長さ238cm、幅は玄室の入口で118cm、羨門で70cmを測り、玄室に近づくにつれて徐々に広がる形状を呈する。羨道の長さと幅からみて、本文群の中では、最も大きい造りであることがわかる。高さは天井壁と側壁の崩壊のために計測不可能である。羨門は二重構造を呈し、しっかりした構造であるが、閉塞等の施設は検出されなかった。

前庭は長さ488cm、高さ78~162cmを測り、非常に長く、羨門側でラッパ状に聞く形状を呈する。壁は外傾している。床面には羨門から180cmの位置に径70cm、深さ12cmの円形状の窪みと、その窪みから前庭入口に向けて、幅40cm前後、深さ5~10cmの細長い溝状構が検出された。この施設は排水溝と考えられる。

堆積した土層についてみると、前庭では明茶色土層上に黒茶色土層と遺物包含層の黒色土層が整然とした堆積を示している。羨道では、天井壁の崩壊によるために複雑な堆積となっている。玄室は天井壁が少しずつ剥離し、徐々に堆積していったものと思われる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	鉄製品	直刀1	馬具1
	須恵器	蓋6	环8
前庭	須恵器	蓋3	高环1

提瓶1 売片少数

本横穴墓は、遺物の質、量とともに豊富で重要ではあるが、前述したように調査中にも落盤があり、遺物の出土位置等を充分に把握することはできなかった。

玄室からは、須恵器の蓋・环合計14個体が玄室中央部から奥壁寄りで出土している。蓋は、口径12.2~13.4cmの大形のものと、11.2~9.9cmの比較的小形のものに分れる。これらはすべて天井部外面をヘラ切りの後不定方向の荒い指ナメ調整をしており、技法上の大きな変化はない。环は口径10.6~8.1cmの比較的小形のもので、技法の変化も見られ

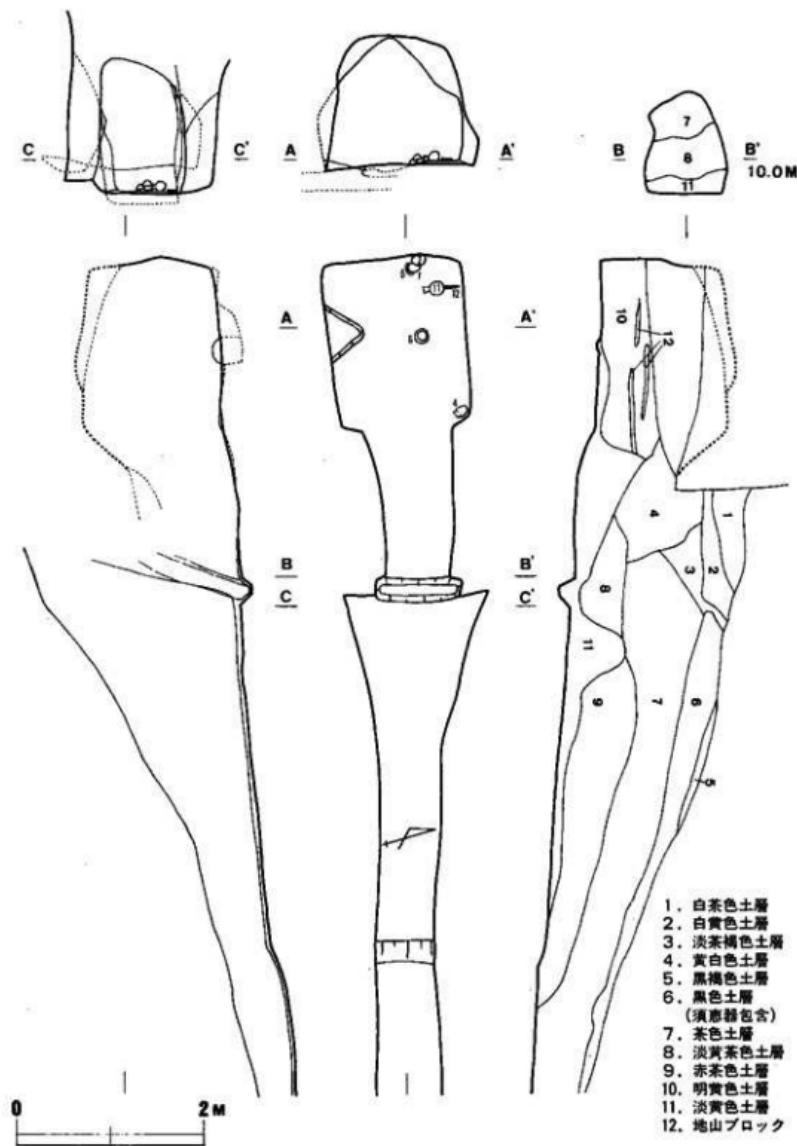


図7 4号横穴墓実測図

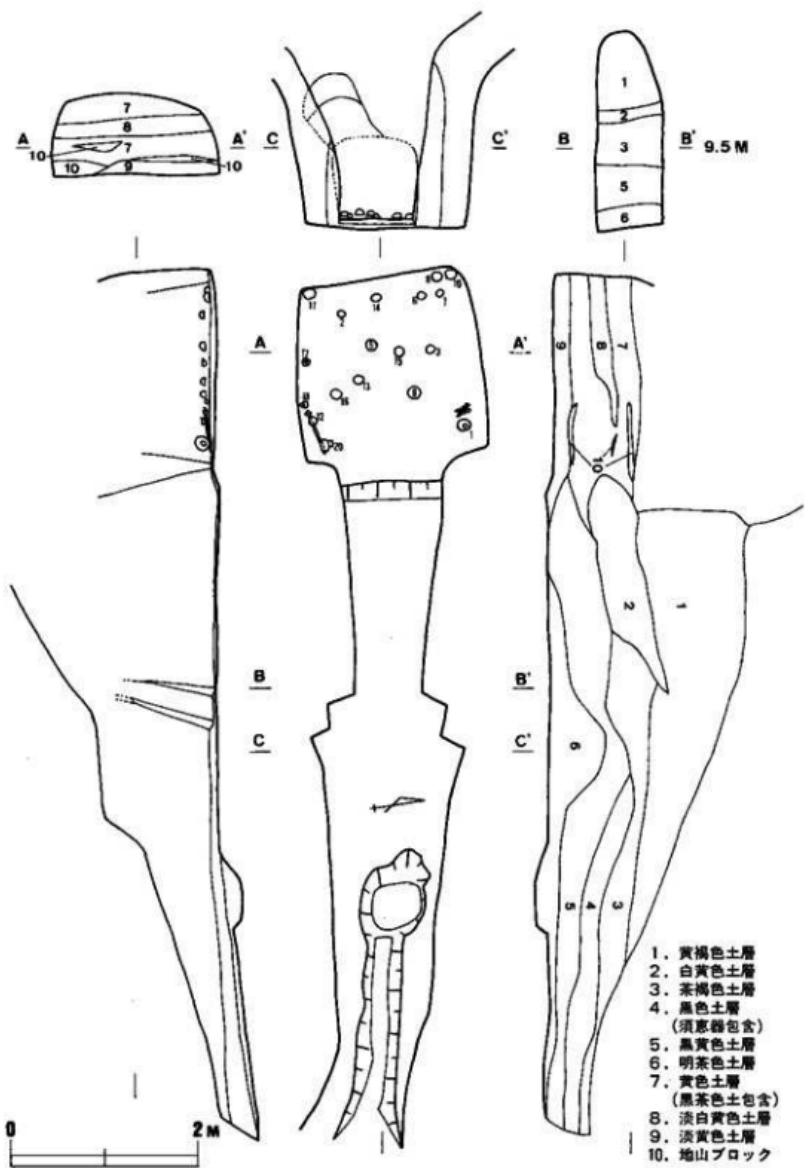


図8 5号横穴墓実測図

ない。

小形高壺は玄室の右側から2個体が出土している。奥壁寄りの17が倒立し、18は横転した状態であった。

長頸壺は右前壁近くから口縁部を内側に向け横転した状態で出土し、平瓶は逆に左前壁近くより正立状態で出土している。

鉄製品としては、直刀と馬具がある。直刀は玄室の右前壁寄りで、切先を玄室入口に向かって、ほぼ東西に置かれている。馬具は左側壁寄りで轡がN字形に銹着した状態で出土した。

この直刀と長頸壺、馬具と平瓶は出土状況から見て、セット関係になるものと思われる。

前庭からは、須恵器壺・高壺・提瓶・甕が破片で出土している。これらは、黒色土層からのものが大半である。上部質土器も黒色土層より出土しており、(図版4-2)は底部に糸切痕をもつ。

#### (6) 6号横穴墓

本横穴墓は5号横穴墓の北側上方約2mに位置し、東南東に開口している。羨門部分の標高は11.5mであり、西支群の調査した中では最高所にあたる。玄室の保存状態は比較的良好く、奥壁付近の天井壁が一部崩壊しているだけである。

玄室の平面プランは、奥行き338cm、横幅は奥壁付近で208cm、入口付近で182cmを測り隅丸でやや綫長の長方形形状を呈する。奥壁は140cmまでは、やや内傾してたちあがり、側壁は内溝して丸い天井に至る。天井の形態は、いわゆるカマボコ形を呈する。床面は壁周辺に浅い溝が断続的にではあるが巡っており、排水溝の役割を果たしていたものと思われる。玄室内でそれが残存しているものは、西支群の調査した中では本横穴墓のみである。床面中央部に多少の凹凸があるのは、玄室がかなり長い期間空洞であったため、風化、浸水の影響のためと考えられる。

羨道は長さ122cm、幅は玄室の入口で72cm、羨門で62cmを測り、長方形を呈する。壁は60cm前後までやや内傾してたちあがり、天井はドーム状を呈し、最高部で高さ86cmを測る。

羨門には、閉塞用の板材を嵌め込んだと思われる横溝が穿ってあり、深さ8cmを測る。前庭は全長550cmを測るが、羨門から246cmのところで約60cmの高い段をもつ。壁は外傾している。床面は、前庭入口から玄室に向ってやや急な上り勾配となる。

前庭では茶褐色土層、淡黄褐色土層、黒色土層が整然とした堆積を示していた。羨道から玄室にかけては、黒色土層が均等に広がり、その上に天井壁崩壊土が堆積していた。

玄室の奥壁には壁面を丁寧に掘削調整した工具の痕跡が残っている。奥壁の南寄りは横

方向、中央部は上から下への方向に削りが認められる。側壁、前壁は削りが浅く、剥離しているところもあるため判然としなかった。掘削調整の工具は、12~18cmのノミ状のものを使用したと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	銅製品	銅芯金貼耳環 4
	鉄製品	刀子 4
	須恵器	蓋 5 壺 5
羨道	須恵器	広口壺 1
前庭	須恵器	蓋 1 風 1 小壺 1

玄室からは、蓋、壺が 5 個体ずつ出土している。蓋は口径 11.8~13cm、壺は 9.6~11.1cm で技法に違いは見られない。出土状況から蓋と壺それぞれ 4 と 8、2 と 11、5 と 10、3 と 9、6 と 12 の 5 組がセットになるものと思われる。

銅製品としては、玄室中央部から銅芯で金が若干残る耳環 4 個体が出土している。

鉄製品は刀子 4 振が玄室の中央部から左側壁寄りに出土しているが、いずれも破損している。

羨道からは、中央部の床面より広口壺が口縁部を玄室に向けて出土している。

前庭からは黒色土層と黄黑色土層より蓋、壺と小壺が破片で出土している。

#### (7) 7号横穴墓

本横穴墓は 6 号横穴墓の北側約 8.6m のところに位置し、東向きに開口している。羨門部分の標高は 10m である。玄室の保存状態は非常に良い。床面には 7cm 前後の土が堆積し人骨も遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き 160cm、横幅は奥壁付近で 112cm、入口付近で 104cm を測り長方形を呈するが、南側壁の入口付近が内側に入り込んでいるため、あたかも片袖式を思わせる造りである。奥壁は約 26cm まではやや外傾し、天井に近づくにつれて内湾する。側壁は 70cm 前後まではやや内傾し、丸天井に至る。奥壁付近の高さは 58cm、入口付近の高さは 92cm を測り、奥に向って次第に低くなる形状を呈する。

羨道は長さ 96cm、幅は玄室の入口で 66cm、羨門で 58cm を測り、長方形を呈する。壁は 40cm 前後までは内傾気味にたちあがり、丸い天井に至る。高さは玄室側で 69cm、羨門側で 80cm を測り、奥壁に向ってやや低くなっている。羨門には副塞用の板材を嵌め込んだと思われる横溝が穿ってあり、深さ 9cm を測る。

前庭は長さ 230cm、幅は 76~94cm を測り、比較的細く短かいものといえよう。床面は

羨門付近で外にくびれ、前庭入口直前まで次第に細くなり、入口部分で広がっている。

上層は、前庭から玄室にかけて整然と堆積している。羨門上の淡黄色土層は天井壁の一部が崩壊したものと考えられる。赤褐色土層は前庭から玄室にかけて堆積し、玄室内では有機質を多く含んだ上層となる。

玄室の奥壁、南北側壁、前壁には掘削調整の痕跡が認められた。奥壁の天井付近は右上から左下へ、床面付近は上から下へ削られている。北側壁では中央から奥壁に向けて、右から左の横方向に、南側壁では逆に左から右への横方向に削られている。前壁では、天井から床面に向けて曲線的に削られている。南・北側壁の奥壁に近い壁が奥壁によって抉られていた。これは前壁同様であったことから、南側壁・北側壁・奥壁・入口側の壁の順で削られていることがわかる。

掘削調整の工具痕跡の幅は7~12cmであり、削り面がU字状にくぼんでいた。これは、6号横穴墓の工具痕跡幅が12~18cmであることから、横穴墓の規模の違いにより、工具の使い分けをしたのかもしれないと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	蓋1 壺1
前庭	須恵器	蓋1

玄室の蓋と壺は奥壁際に伏せた状態で併置され、頭蓋骨の位置からみて枕の役割をしていたものと考えられる。蓋・壺ともに小形品で、セットになるものと思われる。これ以外に副葬品はなかった。

前庭では輪状つまみを有する蓋1片が黑色土層から出土した。

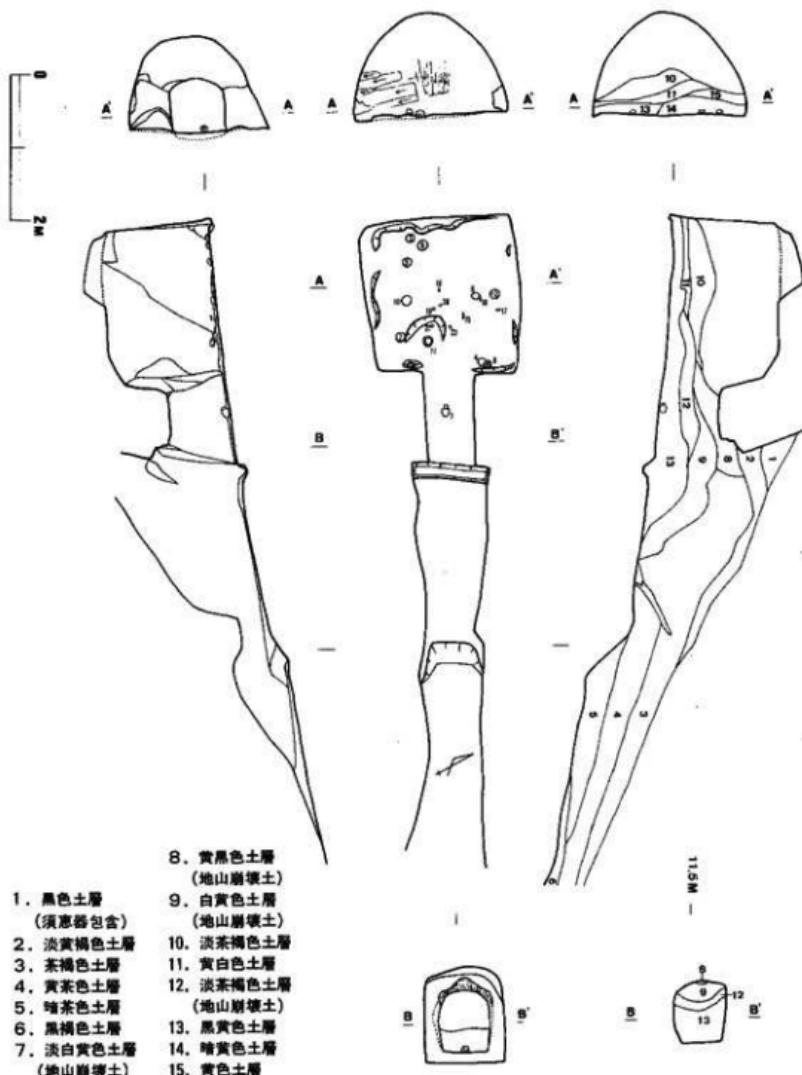


図9 6号横穴墓実測図

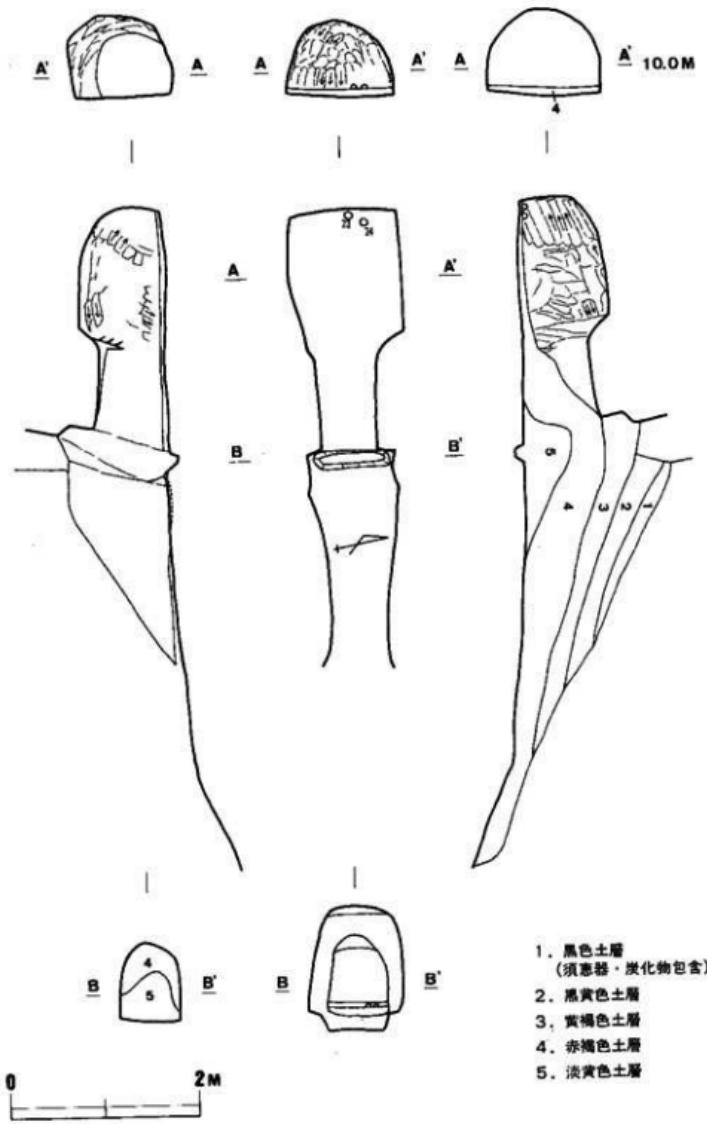


図10 7号横穴墓実測図

## (8) 出土遺物

土器 土器については、ここでは須恵器蓋と坏に關して概括することにする。なお、後の観察表を参照されたい。

蓋坏の形態変化と技法上の特徴から下記の5つに分類した。

### 【I類】 5号(図版3-1)、6号(図版5-1)

いずれも前庭出土である。

蓋の口縁部と天井部との境に稜がみられるが、これは2条の沈線をめぐらすことによつて稜を浮かび上させる手法である。天井部の外面はヘラ切り後、荒い指ナデ調整が施してある。

【II類】 蓋2号(図版1-2)、3号(図版1-5)、4号(図版2-1・2)、5号(図版1-5)、6号(図版5-2~6)、坏2号(図版1-3)、3号(図版1-8~10)、4号(図版2-5・6)、6号(図版5-8~12)

(図版1-2)・(図版1-5)は前庭、その他は玄室から出土している。

蓋はI類よりも稜は明瞭ではなく、天井部と口縁部との境いは浅い沈線や凹線でそれとわかる程度である。口縁部は内湾気味のものが多く、端部は丸みをおびる。

坏は内傾する立ち上り部がやや低く、端部はやや鋭い。受け部はやや斜め上方にのび、端部は丸みをもつ。

蓋・坏ともに外面はヘラ切り後の、(図版5-5)以外は指ナデ調整が施してある。

【III類】 蓋5号(図版3-3・4・5・6・8)、7号(図版5-23)、坏1号(図版1-1)、3号(図版1-9・11)、5号(図版3-9~16)、7号(図版5-24)

器形が著しく矮少化し、口径は10cm未満のものが多くなる。

蓋は口縁部が直行するものとやや外反するものがある。比較的前者に口径10cmを越えるものが多く、天井部との境に回線を1条もつものがある。

坏は立ち上り部が短く且つ内傾し、中には受け部より低いものもある。

蓋・坏ともに外面は丸みをおび、ヘラ切り後、未調整の(図版3-4・5)以外は荒い指ナデ調整が施してある。

### 【IV類】 7号(図版5-25)

前庭出土のもので輪状つまみをもつ破片である。

### 【V類】 5号(図版3-7)

小形品である。口縁部と天井部との境は天井部のヘラ削りによって明瞭である。口縁部外面はやや肥厚し、端部はやや鋭い。知頬臺の蓋と考えられる。

I類の須恵器を出土したものに5号、6号横穴蒸、II類に2～6号横穴蒸、III類に1号、3号、5号、7号横穴蒸、IV類に7号横穴蒸がある。これを陶土の須恵器編年にあてはめると、「I類をII型式第3・4段階、II類をII型式第5段階、III類をII型式第6段階、IV類をIII型式第1段階以降ととらえることができる。

**金属製品** 金属製品については、耳環、直刀、刀子、鉄鎌、馬具が出土しており、以下概要を記すことにする。

耳環は銅芯金貼で4個体が出土している。いずれも銅芯に薄い金メッキをしているが、金の残り具合は良くない。(図版5-19)は長径2.5cm、短径2.3cm、内径1.5cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.7cm、短径0.5cmを測る。(図版5-20)は長径2.7cm、短径2.5cm、内径1.5cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.6cmを測る。(図版5-21)は長径2.6cm、短径2.5cm、内径1.7cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.6cmを測る。(図版5-22)は長径2.6cm、短径2.4cm、内径1.7cmで、間隙は3mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.6cmを測る。4個体は、その大きさ、断面の形より、対関係は検討できない。

直刀は1振が出土している。現存長37cmを測るが、柄は欠損し闇から刀身にかけてのみ残存している。全体は著しく錆化しているものの、闇の断面、切先など細部にわたって観察できる。刀身は刃部断面が綫長の三角形で、造込みは平造りである。身幅は刀身基部で2.5cm、中央部で2.4cmを測る。脊は半脊で、脊幅は刀身基部で0.8cm、中央部で0.6cm、切先側で0.5cmを測る。

刀子は4本が出土している。(図版5-15)は現存長7.6cm、身幅1.1cm、棟幅0.4cmを測る。切先と柄の一部が欠損している。(図版5-16)は現存長6.2cm、身幅1.2cm、棟幅0.3cmを測る。刀身の半分以上が欠損している。柄部には木質が残る。(図版5-17)は現存長7.5cm、身幅1.2cmを測る。刀身の切先から刀部にかけて約2分の1が欠損している。闇は径1.6cm、幅1.1cmを測り、柄部には木質が残る。(図版5-18)は現存長4.5cm、身幅1.3cm、棟幅0.4cmを測る。闇から柄部にかけて欠損している。

馬具は轡が1セット出土し、鞍具などの付属品は伴っていない。轡は鉄製素環の鏡板2枚に二連式の衡と左右の引手がN字形に絡み合い、鍛着した状態で発見されている。衡は引手と直接連結され、鏡板の輪体も衡に連結される。鏡板は楕円形の輪体に立闇が付く形式のものであるが左右の形はやや異なる。輪体の幅は左側4.9cm、右側5.4cmを測る。立闇には横長の方形孔を有し、高さは左右とも1.4cm、幅は左側2.1cm、右側2.25cmを測る。なお、左側の鏡板には長さ0.8×1.2cm、厚さ0.5cmの薄い鐵板が鍛接しており、輪

体と立間との興味ある接合方法である。衡は全長8.5 cmを測る。衡の引手側の輪体は1本の鉄棒の端部を折り曲げて輪とし、タクミ側の輪体は先端を二股に裂いて輪としている。引手は全長13.8 cmを測り、引手壺の幅は2.9 cmとなる。引手も衡同様に輪体の作り分けをしており、衡側の輪体は二股式で、引手壺は折り曲げ式で作られている。このように、衡及び引手に最も圧力が加わり、傷みやすい輪体にその機能、役割に応じた作り方の工夫をみると全体的には革新的であるが、細部にはかなり手の込んだ跡が窺われる。

## 2. 平野高射砲陣地の調査

平野丘陵のはば中央部に、東西にはしる標高30 m前後の丘陵がある。東西約150 m、南北約30 mのこの丘陵上には、太平洋戦争時に実際に使用したといわれる高射砲陣地が4基、銃壇（1人用の堅壇）1基が築かれている。今回の調査の目的は古墳の確認にあったが、結果的には図らずも高射砲陣地の地下構造を知り得るところとなつた。

高射砲陣地の地下構造というのは、上部構造として高射砲あるいは高射機銃を備え付け、固定するための重要な基礎となる地下の仕組みである。調査した高射砲陣地は3基で、最も西側にある高射砲6号陣地から30 m東側に高射砲7号陣地、さらに45 m東側に高射砲8号陣地が存在する。堅壇は高射砲7号陣地の東側約10 mの位置にある。

最も通行状態の良い高射砲7号陣地は、土壁を含めた直徑8 mの円壇である。表上下約1 mの床面に長さ3.4 m、幅20 cm前後の角材を並べた状に組み、交わった所をボルト及びナットで固定した台木が見つかった。床面の周囲の2か所の小空間は、緊急堅壇用であろう。

さて、斐川町の西部に位置する出西地区には、戦時中の海軍基地である「出西飛行場」跡が今でも残されている。「終戦間際には何度も敵機の攻撃を受けたものです。」と地元の人はいう。また、当時平野丘陵の谷間を飛行機の格納庫にする計画もあったとされる。敵機襲来の一つの証拠として、新川通り（旧新川）に架かる鉄橋に、敵機の攻撃を受けた弾痕跡が現在も生き生きと残っている。それを迎え撃つために、この平野丘陵の高射砲陣地では幾度かの発砲もしたそうである。

## 3. 平野間堀

平野間堀は、平野丘陵西側の高瀬川から丘陵内の水田への用水路として掘削されたものである。全長は約60 m、西側入口の幅は6 m、東側出口の幅は5 mを測り、内部は通行可能ではあるが、天井部にはかなりの剥落が見られる。1893年（明治26年）に浚渫計画

があったという記録が残存しているが、開通当時の新川、高瀬川との関係は不明である。なお、高瀬川が開通した1676年（延宝5年）にまで逆上することはないと推定できる。また斐川町には、斐伊川と高瀬川を結ぶ「出西間橋」が存在し、各河川、用水路等に多量の水を給していた。平野間橋は、その用水路の一つにすぎないが、その開通に際しては、地域住民による相当の労力が必要であったろうと推測できる。なお、本間橋の機能は本事業に伴う開発により昭和58年に消失した。

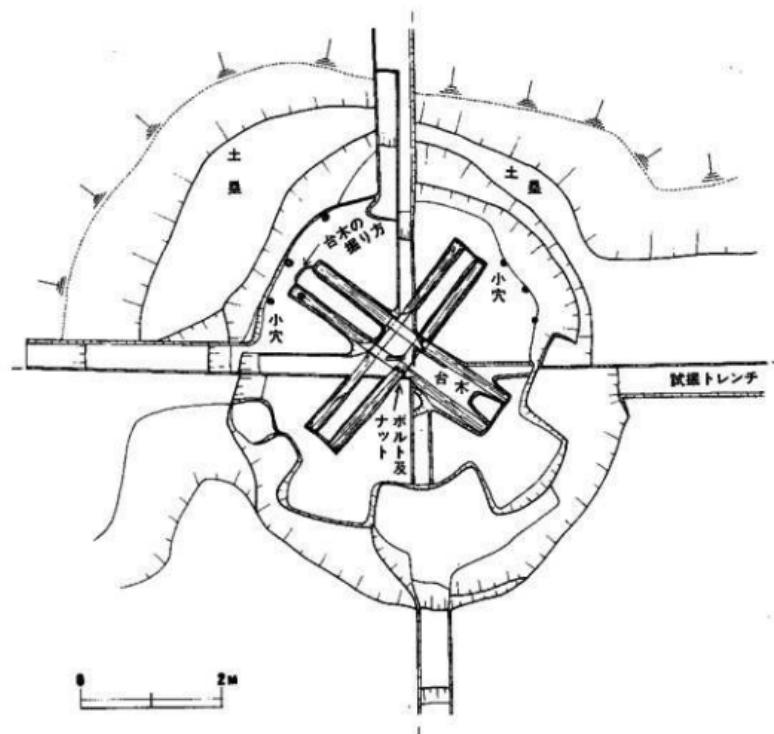


図11 平野7号高射砲陣地実測図

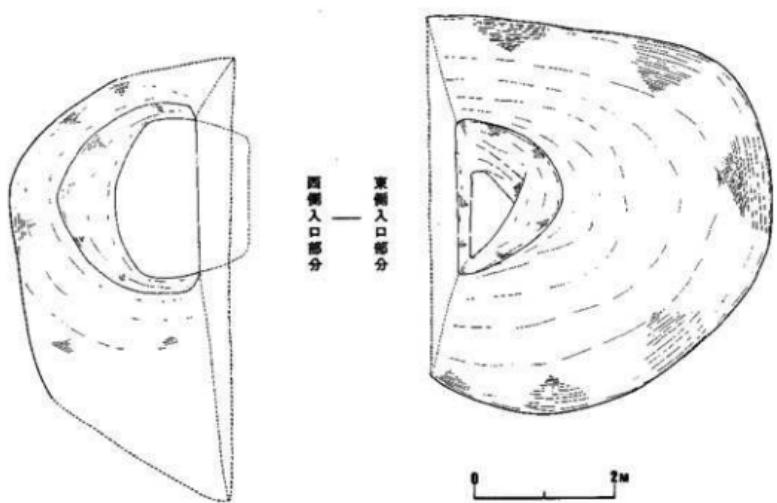


図12 平野間橈略図

## IV まとめ

今回の調査で明らかとなった問題点を列記してまとめとする。

1. 今回は7穴の横穴墓を調査したが、未調査区域の予想される10穴を含めると17穴以上の横穴墓が存在していたことが推定される。今後、これらの横穴墓を営んだ集団の解明が必要とされる。また、丘陵頂部に存在する三角点古墳や平野丘上古墳群との関連性も検討されなければならない。
2. 横穴墓は群構成をなすのが一般的であるが、それは幾つかの小単位の集まりで構成されているといえよう。本支群の場合も同様で、横穴墓の立地、規模、出土遺物から2、3の単位を推定することが可能である。しかし、調査した7穴だけで結論を出すことはできず、次回報告される東支群の群構成を把握したうえで考察していく必要があろう。  
註1.
3. 本支群の形態的特徴は、まず前庭が比較的長く、表道もそれに比例して長いことである。後門は4号、5号横穴墓のみ二重構造で、他の横穴墓とは異質な造りを思わせる。玄室の平面形態は一般的に方形の縦長プランで、玄室の横断面は6号、7号横穴墓は丸大井である。  
以上のことが挙げられるが、前庭から表道が長いのは、地形が緩やかな上に地山（真砂土）が柔かいため、玄室を造り出すのには地山の奥深くまで掘ることが必要であったためであろう。
4. 横穴墓の築造年代を考えるにあたっては、前述した出土須恵器の編年觀から7世紀初頭に開始され、中葉には最盛期を迎え、後半には築造を終了したものと考えられる。しかし、例えば、I類の墓にみられる棟は前段階の手法が残るが、大井部外面にヘラ切り後の指ナデ調整が施されていること、また玄室からII類が一括して出土する4号、6号横穴墓、III類が一括して出土する1号、7号横穴墓との時間的な差など出雲地方における須恵器編年に関する懸案の課題が多く、今後の研究に期待するものである。註2.
5. 現代の遺跡ともよぶべき高射砲陣地と間隔の調査も行った。古代・中世だけでなく、近現代のこういった遺構も将来的には貴重な文化遺産になると思われたからである。

註1. 「発掘と地域の歴史像の発展」(柏青房『考古資料の見方<遺跡編>』、1977年)

註2. 『陶邑』(大阪府教育委員会、1978年)

## V 出土人骨鑑定

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井 上 晃 孝

### (1) 6号横穴墓出土人骨

玄室内には、土器の配置からみて4～5体が埋葬されたと推定されるが、残存骨が極めて少なく、小さな骨片化しており、資料としては不適当である。

玄室の土器の配置から番号をつけると、A、B、C、D、Eとなり、その周囲の人骨について検討する。(図13。)

A：小さな頭骨片1個と床砂中より歯牙4個を検出したのみである。

歯牙は小臼歯1個、大臼歯3個で、すべて永久歯であり、咬耗度はMartinの分類では2～3<sup>o</sup>に相当し、年令は壮年(30才代)が推定される。性別、身長は不明である。

B：残存骨は全く検出されない。

C：金環が散在するが、残存骨、歯牙は全く検出されない。1体が埋葬されたと推定される。

D：刀子1本があり、残存骨は少ないがこの玄室内では最も多い。

骨の配置は極めて不自然である。残存骨は右側頭骨(錐体部)、左右不明の上腕骨片、大腿骨と脛骨の一部である。

性別は不明であるが、年令は骨の大きさから一応成人が推定されるが、身長は不明である。

E：刀子2本をおいて、下方に骨片2個と左右不明の上腕骨片の一部が残存するのみである。性別・年令・身長は全く不明である。

まとめ 6号横穴墓内には、須恵器、刀子と金環が散在し、その配置から数人が埋葬されたと推定される。

残骨量は極めて少ない。わずかの残存骨の配置からして3体分が確認されたにすぎない。

A：性別不明、年令は壮年、身長は不明である。

D：性別不明、年令は一応成人、身長は不明である。

E：性別、年令、身長ともに不明である。

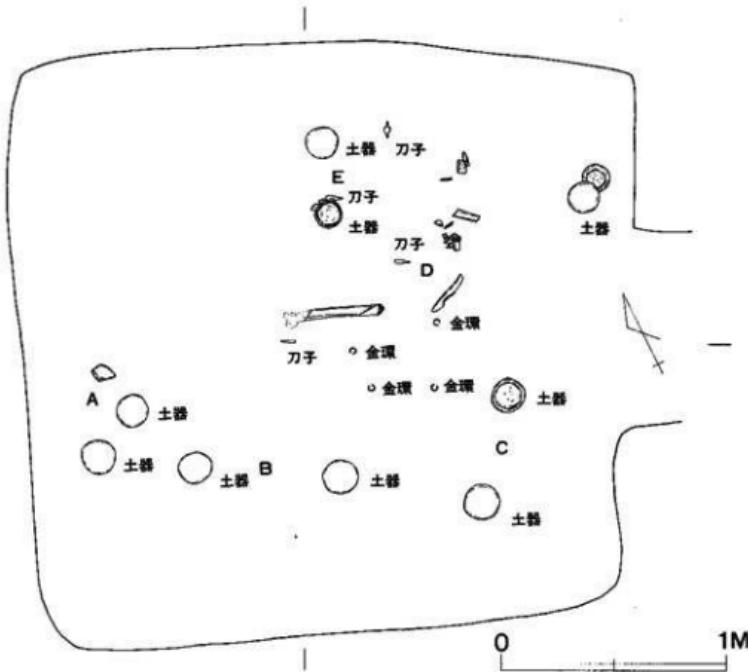


図13 6号横穴墓人骨出土状況

## (2) 7号横穴墓出土人骨

1.はじめに 玄室内には保存状態が比較的良好な人骨が残存していた。

残存骨の配置は極めて不自然であるが、1体が埋葬されたことが確認された。この出土人骨について、性別・年令・身長・血液型について報告する。

2.出土人骨の概観 7号横穴墓内には頭骨と4肢骨、その他の骨が散在していた。埋葬時に自然位で安置されると、骨は骨格順に一定の方向性をもち、左右対称的に残存（一部消失骨はあるにしても）するのであるが、本横穴墓の人骨配置は極めて不自然である。

（図14）

椎骨（頸骨・胸骨・腰骨）、胸郭骨・上肢骨、下肢骨の残存骨をみると、骨の一定の方向性（近位部～遠位部配列）と左右対称性は全くなく、白骨化した段階で、後日かなり無操作に骨を移動した形跡がみられる。

骨の表面の色調は、黄白色～黄褐色調を呈し、骨質は極めて脆弱なものから、比較的堅いものまであるが一般的に脆い。

骨を採取後、骨格順に再配列してみると、欠損、消失骨はあるが、重複した骨は検出されず、1体が埋葬されたことが確認された。（第1表）

3. 残存骨 頭蓋骨は保存状態がよく、ほぼ完形に近いが、頭蓋底部を欠いている。（写真1）上顎骨には一部歯牙が付着し（写真2）、下顎骨は右の犬歯の歯槽部から左下顎全体が残存し、歯牙が付着している（写真3）。その他遊離歯牙も認められ、歯式に従って示すと第2表の通りである。

歯牙はすべて永久歯で、第3大臼歯が萌出しかかっている。歯牙の咬耗は切歯、犬歯、臼歯とも極めて軽度で、Martinの分類では0～Iである。

頸椎骨は1～7頸椎骨であるが、残存骨はそのうち3個で、第2頸椎骨（軸椎）のみが完形である。胸椎骨は1～12胸椎骨があるが、そのうち6胸椎骨が残存しているが完形のものはない。

腰椎骨（1～5腰椎骨）のうち4個残存するが、うち2個はほぼ完形である。仙骨、尾骨はない。

胸郭……胸骨柄、胸骨体、剣状突起は欠く、肋骨は若干残存するが完形のものはなし。

上肢骨…肩甲骨は左右とも関節窩と肩峰部、その周囲のみ残存。鎖骨は右のみ完形で長さ10cmと小さい（成人♂14cm, ♀13cm）。上腕骨は左右とも残存するが近位部（上腕骨頭部）が欠落している。桡骨は左右とも近位部～骨体部が残存するが遠位部を欠落している。尺骨は左右とも遠位部を欠く、手骨は左右とも全くない。

下肢骨…寰骨は左右とも腸骨があるが極めて小さい。恥骨は左右とも欠落、坐骨は右のみ残存、大腿骨は左右とも骨体部を中心に残存するが、近位部と遠位部を欠く。

膝蓋骨は右のみ残存。脛骨は左右とも骨体部を中心に残存するが近位部と遠位部を欠く、腓骨は左のみ残存（遠位部）、足骨は左右の距骨と距骨のみ残存。

人骨の計測値（単位：mm）

頭蓋最大長：170.3 頭蓋最大巾：138.5 最小前頭巾：92.0

最大前頭巾：114.0 上顎巾：100.0 上顎高：64.2 両耳巾：102.0

頸弓巾：112.0 両眼窩巾：91.5 眼窩高：29.2 眼窩巾：36.8 口蓋巾：36.0

鼻高：49.0 鼻巾：23.5 上腕骨：左228.0 右230.0 大腿骨：右330.0

脛骨：270.0

4. 性別の推定 性別判定には、形態学的検査と人類学的計測値による判定法がある。

頭蓋骨は完形ではないが、検査できる範囲内で検討する。

### 1) 頭蓋骨の形態学的検査

- 前頭結節 ..... 中等度に発達  
オルトメトビカ（顎鉛直型） ..... やや鉛直に近い  
眉弓の隆起 ..... 発達弱い  
眉間の隆起 ..... 発達弱い  
頬骨巾 ..... やや狭い

以上の形態学的特徴は女性骨が一般に具備している条件であるので、本尾骨は女性であると推定する。

### 2) 頭蓋骨の対照値との比較

3) の頭蓋骨の計測値はかなり小さく、全般的に女性域の範囲に属する。

### 3) 頭蓋骨の判別閾値による性別判定

埴原（1964）の頭蓋骨の計測値による判別閾値による性別判定法に従って算出する。

$$Y = X_1 + 0.2207X_2 + 1.0950X_4 + 0.5043X_5$$

$X_1$ (頭蓋最大長)	170.3 mm	$X_2$ (頭蓋最大巾)	138.5 mm
$X_4$ (頬骨巾)	112.0 mm	$X_5$ (上顎高)	64.2 mm

判別閾値より計算値が大きいと♀、小さいと♂と判別する。

結果	判別閾値	資料計算値	判定
	380.8439	355.8830	女性(♀)

以上1)、2)、3)の各法ともいずれも女性と判定される結果を得た。

## 5. 年令の推定

### 1) 頭蓋冠縫合

頭蓋冠の3大縫合の冠状、矢状、人字縫合とも全く癒着が認められないことから25才以下の若年者と推定される。その上、本尾の頭蓋冠の前頭縫合はすでに幼児期に癒着するのが普通であるが、例外として全く癒着を認めない。

### 2) 歯牙の萌出と咬耗

- ① 歯牙の萌出……残存歯牙はすべて永久歯で、表2に残存歯牙を示す。第3大臼歯はすべて歯冠部のみで、歯根部の形成がなく、右上、左下の3個は歯槽内にとどまっている。（第3大臼歯の萌出は17（18）才～25才まで）

② 歯牙の咬耗……咬耗はほとんどみられない。とくに臼歯の場合、咬頭の咬耗は極めて軽度でMartinの分類では0~1°で、切歯、犬歯でも同様である。

### 3) 上顎骨の切歯縫合

切歯縫合は25才前後で始まり、30才前後に癒着が終るといわれているが、本資料では全くみられない。その他の横口蓋縫合、正中口蓋縫合も癒着は全く認められない。以上から年令は20才前後と推定されるが、10代後半の可能性がより強い。

### 6. 身長推定 生前の身長推定は完全な4肢骨（長管骨）の最大長に性別、各骨別に指定された相関係数を乗じて算出する。

木尾の4肢骨は完形のものはないが、比較的保存良好な骨について欠損部分を考慮して最大長を算出し身長を推定する。

資料骨			骨の最大長mm	藤井法	工藤法	Pearson法
骨名	性	左右		(1.960)	(1.961)	(1.899)
上腕骨	女	左	228	135.5	—	134.8
		右	230	136.0	—	135.4
大腿骨	女	右	330	135.0	138.5	130.7
		左	270	136.9	136.1	136.9
平均値			135.9	137.3	134.5	

以上から生前の身長は大約136.0cm位と推定する。

### 7. 血液型

#### 1) 資料……歯牙：右下顎第1小白歯（右）

資料を粉末化し、脱脂処理後固定して検査に供した。なお、対照として血液型既知の歯牙も同様に処理して検査に供した。

#### 2) 抗体

抗A、抗B血清は市販品、抗O(H)レクチンはUlexeuropaeus種子の抽出液を用いた。未処理血球に対する凝集素価は抗A、抗B血清は1:256、抗Hレクチンは1:64であった。パパイン酵素処理血対に対しては、抗A、抗Bとともに1:1,280、抗Hレクチンも1:1,280になるように調整した。

#### 3) 抗体解離試験

資料として歯牙粉末約10mgを用いた。抗体感作時間は室温5hr、さらに室温で1夜

行った。洗浄後解離液はPBSを加え、55°C 10min 热解離後解離液を別の小試験管に移し、指示血球（未処理血球、処理血球）を加えた。さらに、37°C 10min放置後、遠沈し、肉眼的、光顕的に凝集の有無で判定した。

結果、第3果に示すように未処理血球ともにB型と判定される結果を得た。

8. 骨の不自然な配列について 残存骨を骨骼順に配列してみると、消失骨はあるが、ほぼ1体分に相当し、重複した骨がみとめられないことから明らかに1体が埋葬され、追葬のあとが全くない。

伸展葬の場合、骨は生前の体形に従い骨骼順に一定の方向性のある配列をするのに本屍骨の配列は極めて異状である。

頭骨のすぐ下にくる筈の下頸骨が遠く離れて位置し、椎骨、上肢骨、下肢骨、骨盤らの位置もかなり上下、左右に方向性もなくばらばらに散乱している。

これらのことを考えた場合、後日白骨化した時期に何らかの目的で人為的に移動されたことは確実である。

9. まとめ 本横穴墓内には比較的保存状態の良好な人骨が極めて不自然な配列で残存していた。

1. 埋葬者は1名である。
2. 埋葬者の性別は女性、年令は20才前後であるが10代後半の可能性がより強い。身長は136cm位と推定され、血液型は歯牙からB型と判定された。
3. 残存骨には特記すべき病変らの異常を認めない。

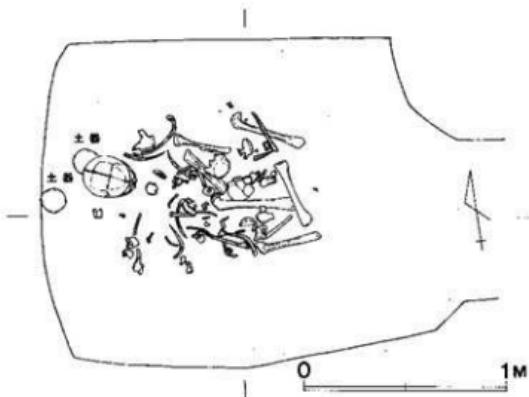


図14 7号横穴墓人骨出土状況

第1表 残存骨一覧

骨格		骨数	本尾骨	備考
頭蓋骨	頭骨	1	○ほぼ完形に近いが顎蓋底部を欠く	
	下頷骨	1	○ほぼ正中から左側は残存(右側欠)	
椎骨	頸椎骨	1~7	○(3)軸椎のみ完形、他は破損	
	腰椎骨	1~12	○(6)破損	
腰骨	腰椎骨	1~5	○(4)2個のみ完形、他は破損	
	仙骨	1~5	欠	
	尾椎骨	1~3(5)	欠	
胸郭	胸骨柄	1	欠	
	胸骨体	1	欠	
	剣状突起	1	欠	
	肋骨	12対	○(若干)左右とも完形なし	
上肢骨	肩甲骨	1対	○(1対)関節窓と眉峰部のみ	
	鎖骨	1対	○(右のみ)完形	
下肢骨	上腕骨	1対	○(1対)左右とも近位部欠	
	橈骨	1対	○(1対)左右とも遠位部欠	
	尺骨	1対	○(1対)左右とも遠位部欠	
	手骨	1対	欠	
足骨	寛骨	1対	○(1対)脛骨(左右)と坐骨(右)のみ	
	大脚骨	1対	○(1対)左右とも遠位部欠	
	膝蓋骨	1対	○(右のみ)完形	
	脛骨	1対	○(1対)左右とも遠位部欠	
	腓骨	1対	○(左のみ)遠位部のみ残存	
	足骨	1対	○(左のみ)踵骨と距骨のみ	

○：一部でも残存していて、その名称のはっきりしているもの

( )：( )の中の数字は残存骨数

欠：欠落骨(消失骨)

第2表

歯式

8	7	6	5	4	3	2	1	上顎	1	2	3	4	5	6	7	8
第二臼歯	第一臼歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第三小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯	第一臼歯	第二臼歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯
第三臼歯	第二臼歯	第一臼歯	第二小臼歯	第三小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯	第一臼歯	第二臼歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯
第一臼歯	第二臼歯	第一臼歯	第二小臼歯	第三小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯	第一臼歯	第二臼歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯
第一臼歯	第二臼歯	第一臼歯	第二小臼歯	第三小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯	第一臼歯	第二臼歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第一中切歯	第二中切歯	第三中切歯	犬歯

さらにこれを番号だけにすると

8	7	6	5	4	3	2	1	-	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	-	1	2	3	4	5	6	7	8



○△：残存歯牙(付着歯牙)  
○×：残存歯牙(遊離歯牙)

○\*：残存歯牙(埋没歯牙)  
×：欠落歯牙

第3表 血液型検査結果（抗体解離試験法による）

資料	血球 抗体	未処理血球			酵素処理血球			判定
		抗A	抗B	抗O(H)	抗A	抗B	抗O(H)	
歯牙(右下顎第1小臼歯: 4)		-	+	-	-	+	+	B型
対照	歯牙 A型	+	-	-	+	-	+	A型
	歯牙 B型	-	+	-	-	+	+	B型

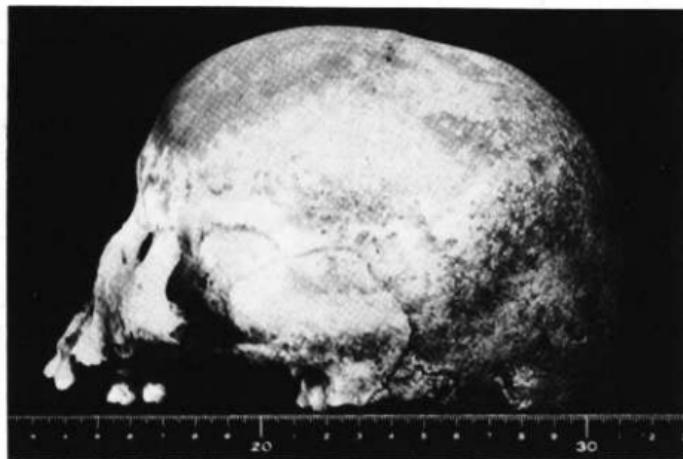


写真1 頭蓋骨（左側頭部）

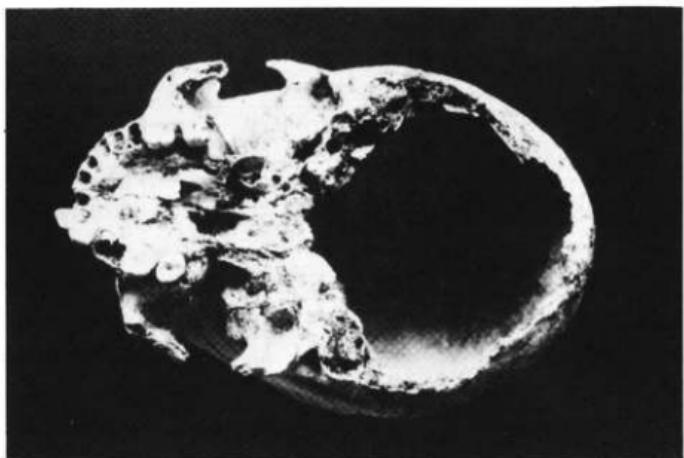


写真2 上顎骨歯牙付着状況

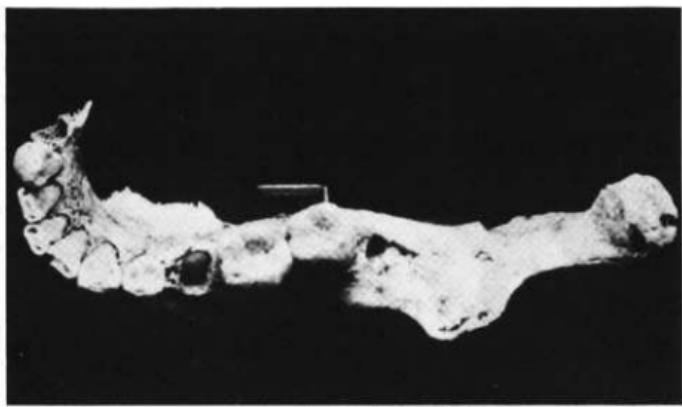
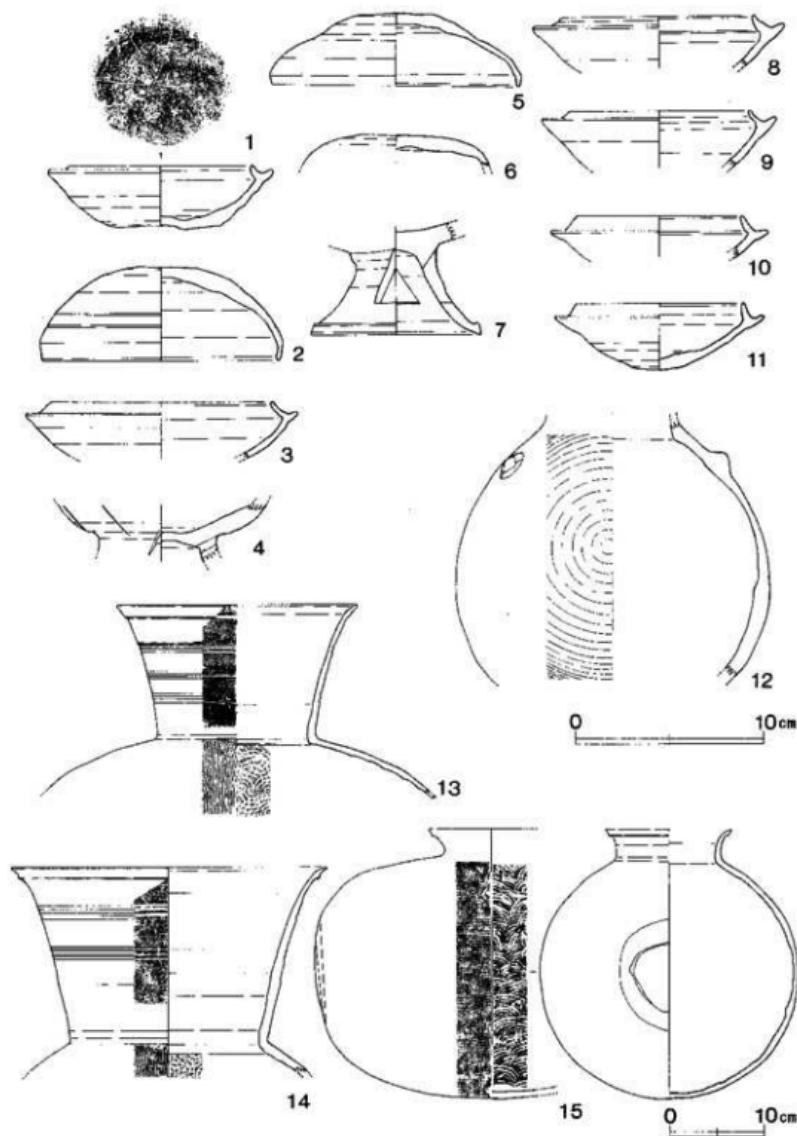


写真3 左下顎歯牙付着状況

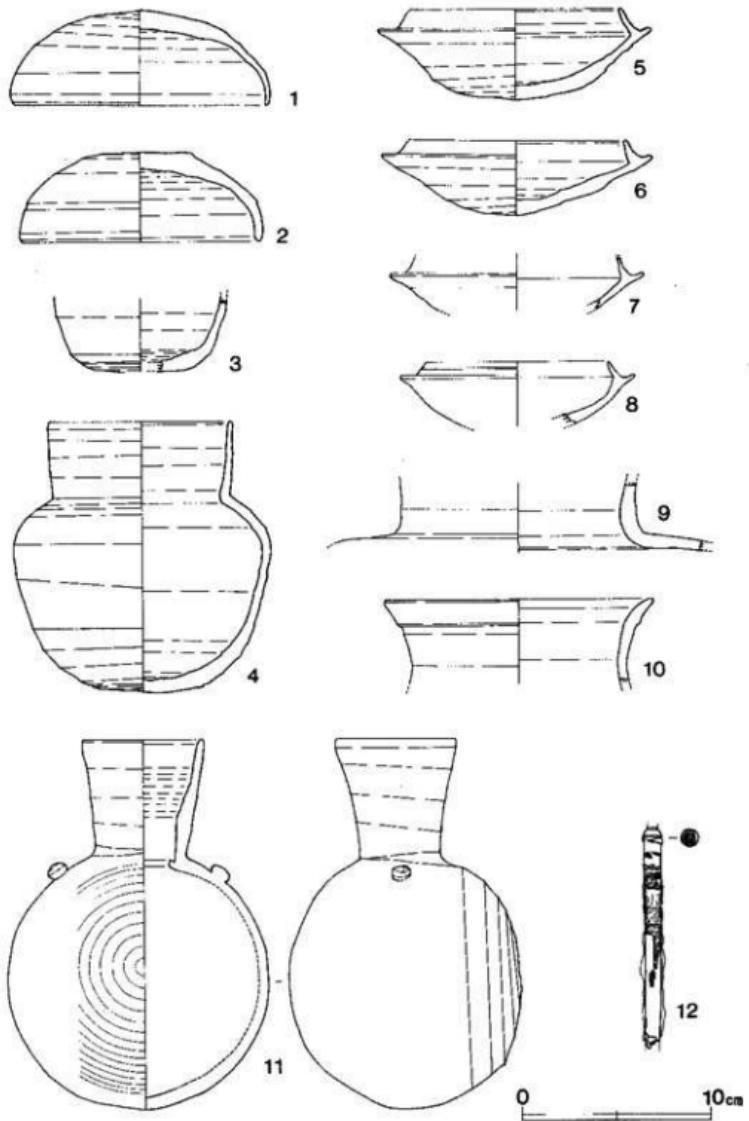
# 図 版



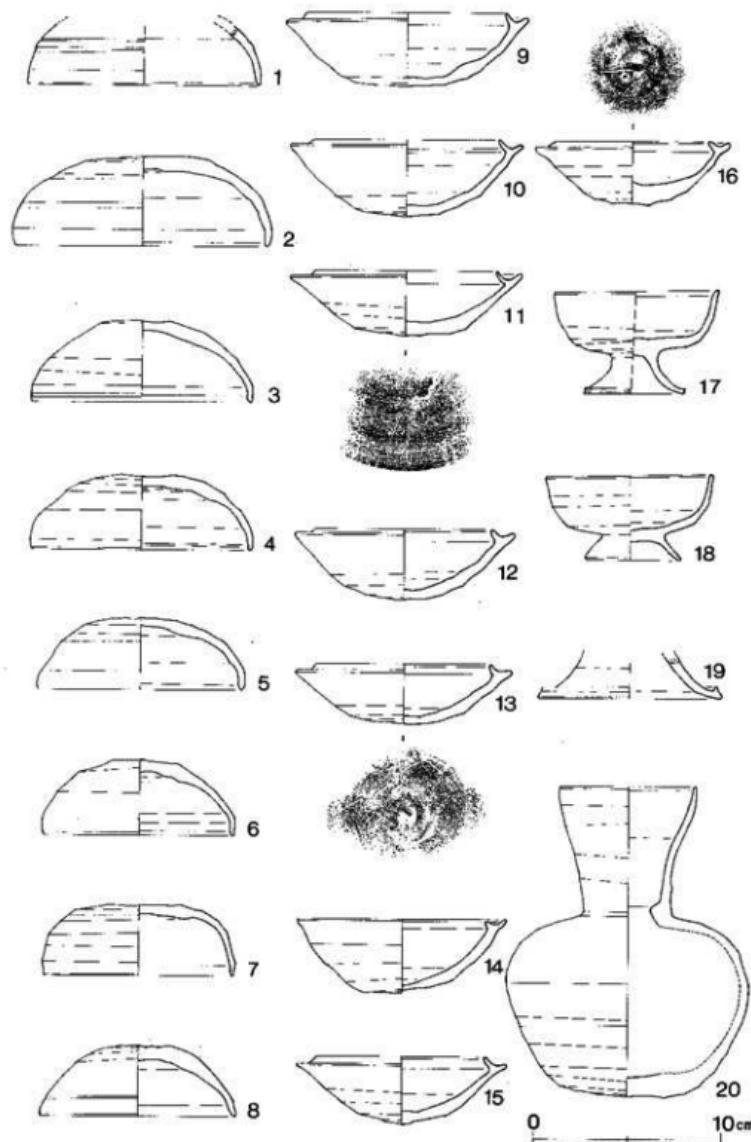
図版 1



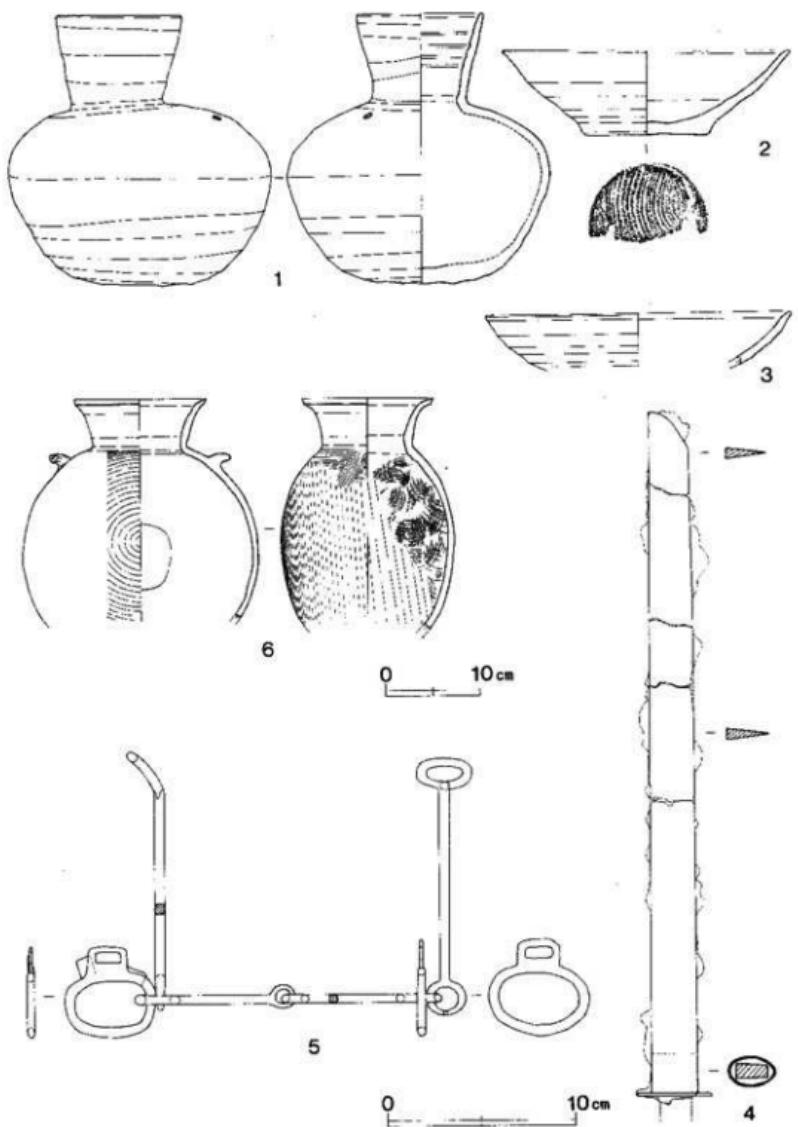
1号(1)、2号(2~4)、3号(5~15)横穴墓出土遺物実測図(13~15は3%、他は3%)



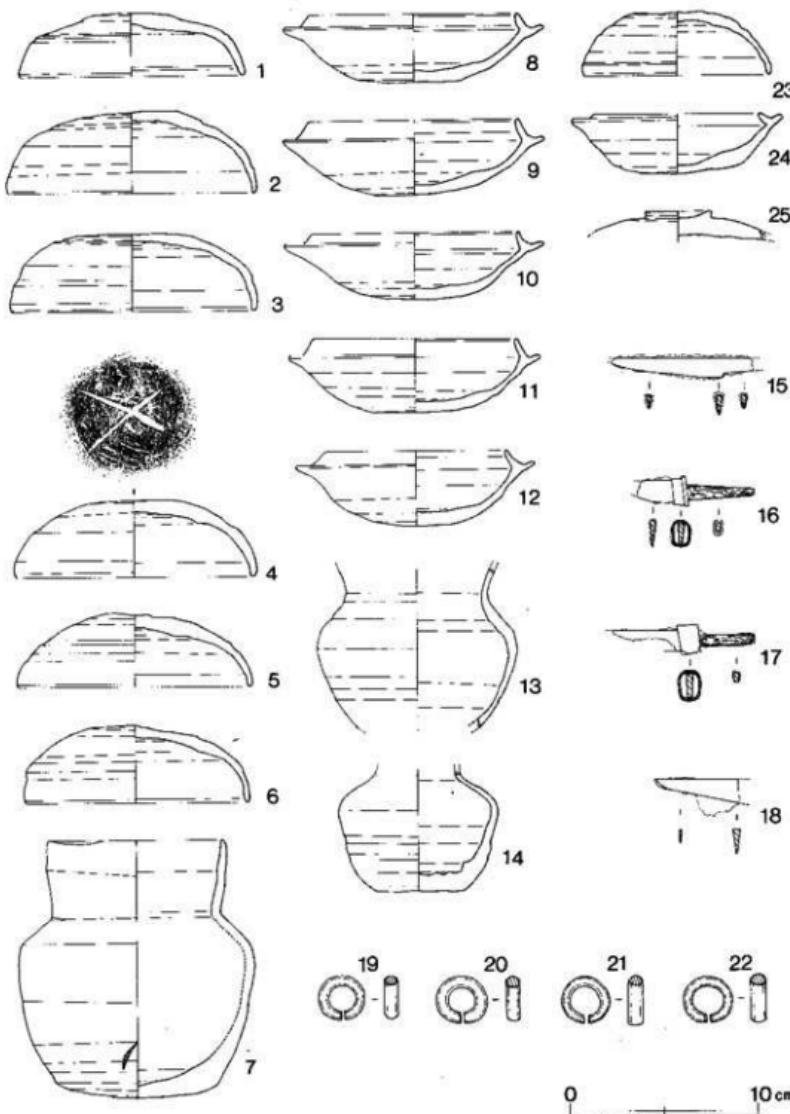
4号横穴墓出土遺物実測図(%)



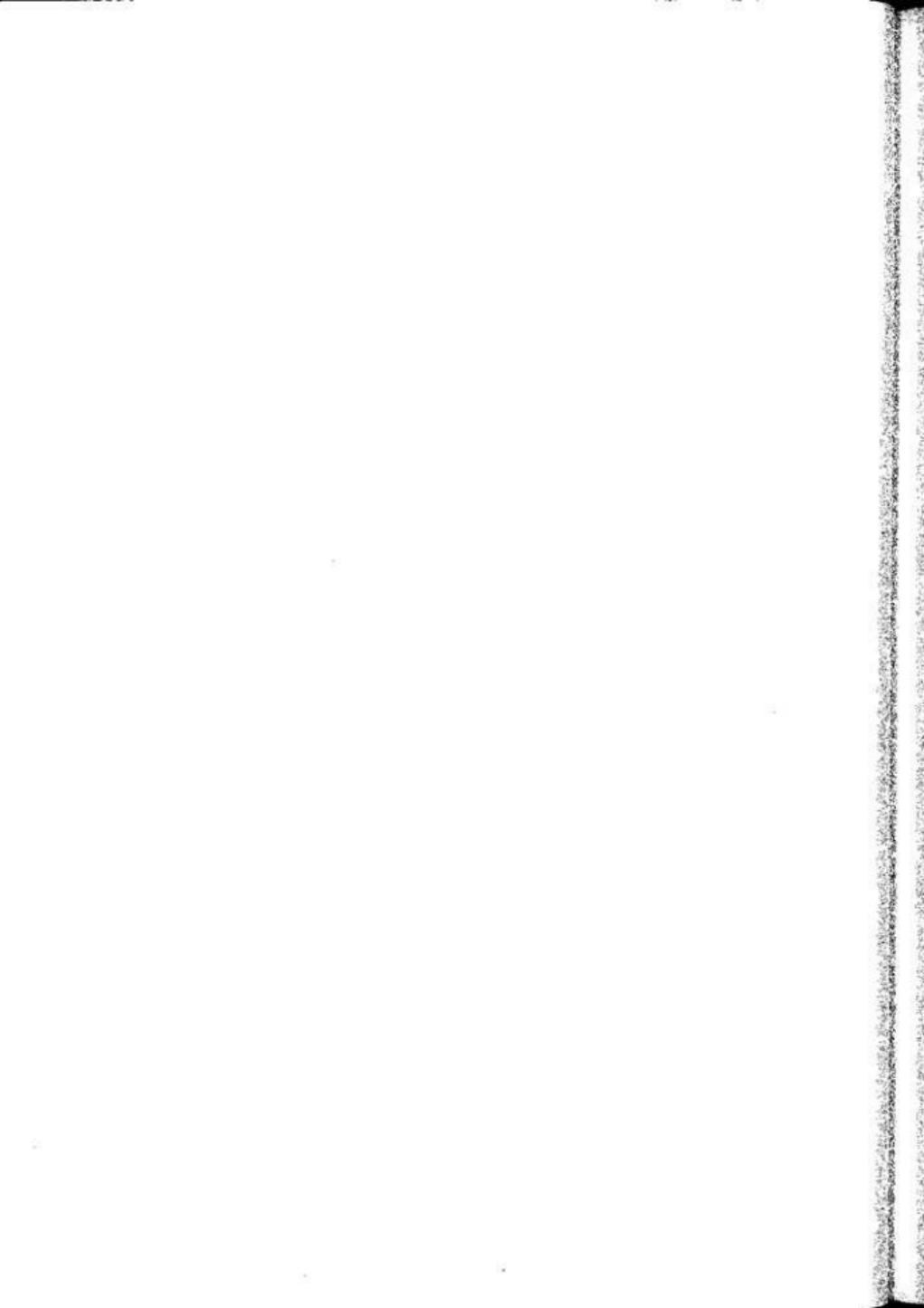
5号横穴墓出土遺物実測図(3)



5号横穴墓出土遺物実測図 (6は%、他は%)



6号(1~22)、7号(23~25)横穴墓出土遺物実測図(%)



# 出土土器観察表

図版6

香種	大阪番号 アーチ番号	法 種	形 態	技 法	備 考
1 号 横 穴 墓	蓋 坯 (身) 1 - 1 30 - 1	口径：9.7 器高：3.15	内傾する短かい立ち上り部は、端部が丸く、やや斜め上方にのびる。受け部は端部が丸くふくらむ。立ち上り部と受け部との高さの違いはありません。 凹状を呈する底部はやや丸みをもつ。	底部外面は、ヘラ切り後粗いナデ。 底部内面は、指彫研磨調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 底部内面に「光」のヘラ記号有り。 玄室出土。
2 号	蓋 坯 (蓋) 1 - 2 30 - 2	口径：12.4 (推定)	大形で、口縁端部は丸く、内側に丸味をもつ。口縁部はゆるやかに内湾し、天井部に歪る。 口縁部と天井部の境に、2条の沈線をもつ。	天井部外面は、ヘラ切り後ナデ。 内面は仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎上：ヤヤ粗 3mm以下の白色 砂粒含む。 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土。
横 穴 墓	蓋 坯 (身) 1 - 3 30 - 3	口径：11.8 (推定)	内傾するたちあがりは、端部を丸くおさめる。 受部はほぼ平らで、端部を丸くおさめて底体部につながる。 底体部との境に指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部に残存。 前庭堆積土出土。
墓	高 坯 1 - 4		大型で、無蓋のものとされる。 脚は3方向三角形の通りの割りつけを残す。	環部・底部内面は、仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：ヤヤ粗 3mm以下の砂粒含む。 焼成：普通 色調：淡青灰色
3 号 横 穴 墓	蓋 坯 (蓋) 1 - 5	口径：13.1 器高：3.9	大形で、口縁部は丸く、内側に1条の沈線をもつ。口縁部はゆるやかに内湾して天井部に歪る。 天井部は、ほぼ平らである。	天井部外面は、ヘラ切り後粗いナデ。内面は、指による不定方向ナデ仕上げ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：淡青灰色 残存。前庭堆積土出土。
	蓋 坯 (蓋) 1 - 6		天井部は、ほぼ平らになる。	天井部外面ヘラ切り後、粗いナデ。 内面不定方向ナデ仕上げ。 ロクロ右回転。	胎上：緻密 焼成：普通 色調：灰色 天井部のみ残存。 前庭堆積土出土。

図版 7

	器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
3 号 機 穴 基	高 坯	1 - 7 30 - 7	底深：10.0	短脚1段、2方向に 三角形の透し。 底縁部上端はたちあ がる。	環部底端部は、仕上げ ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密2mm以下 の白砂含む。 焼成：良好 色調：暗灰色
	蓋 坯 (身)	1 - 8	口径：10.0 (推定)	内傾するたち上りは やや高く、端部は丸い。 受部は斜め上方にの び、端部を丸くおさ め底部にいたる。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部有残存。 前庭堆積土出土。
	蓋 坯 (身)	1 - 9	口径：9.5 (推定)	内傾するたち上りは やや外薄し、口縁端 部は鋭い。 受部は、斜め上方にの び、端部を丸くおさ めて、底体部に至 る。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 口縁部有残存。 前庭堆積土出土。
	蓋 坯 (身)	1 - 10	口径：8.8 (推定)	内傾するたち上りは 高く、端部は丸い。 受部はほぼ水平で、 端部を丸くおさめ、 底体部に至る。 底体部との境に指に による凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 口縁部有残存。 前庭堆積土出土。
	蓋 坯 (身)	1 - 11	口径：8.8 高さ：3.6	内傾するたち上りは やや高く、端部は鋭 い。 受部は斜め上方にの び、端部を丸くおさ めて、底体部に至る。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 有残存。 前庭堆積土出土。
	提 扇	1 - 12	体部最大径： 16.8	中型でつまみが両肩 につく。	体部外面は、前後肩 ともカキ目、内面は ナデ。	胎土：密 2mm以下の白砂粒 含む。 焼成：良好 色調：黒灰色
	盤	1 - 13 30 - 5	口径：25.6 (推定)	大型で、口縁端部は 丸く外反する。 頂部は長く、内傾し ながら肩部に至り、 2条の凹線が3ヶ所 に入り、間に5~10 集の波状紋が入る。	肩部から体部にかけ て、外面タタキ目 (1.8cm×2.8cm 7 条)、内面あて木口 (半径2.8cm 7条の 同心円)が残る。 頂部は、回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部～肩部にか けて有残存。 前庭堆積土出土。
	盤	1 - 14	口径：33.4 (推定)	大型で口縁端部は丸 く外反し、頂部との 境に凸筋をもつ。 頂部は長く、3条の 凹線が2ヶ所に入り その間に18~24条の	口縁部から頂部は回 転ナデ。 肩部外面タタキ目 (2×2.5cm 7条) 内 面あて木口 (半径3 cm 6条) ロクロ回転	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 口縁部から肩部が 有残存。 前庭堆積土出土。

図版8

	器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
3 号 横 穴 墓	壺			波状紋をもつ。	方向不明。	
	横瓶	1-15 30-6	口径：13.4 (推定) 器高：29.25	大きく外反する口縁部は、端部は鋸く、二重口縁となる。頸部は短く、体部は俊形。	胴部外面タタキ目 (1.5 cm前後7~9条)と斜行目文(8~10cm、6~7条) 内面はあて木目(半径2cm7条)他は回転ナデ。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 少残存。 前庭堆積土出土。
4 号	蓋 坏	2-1 30-8	口径：13.8 器高：5.05	内湾して端部を丸くおさめた口縁部と、弓形状を呈する天井部との境は、不明瞭である。 器壁は薄く、器高はやや高い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋 坏	2-2 30-9	口径：12.5 器高：4.8	やや内湾して端部を丸くおさめた口縁部と中心部が平らで、次第に弓形状になる。 天井部との境に1条の沈線をもつ。 器壁は厚く、器高はやや高い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗で黒 色タールを多く含む。 焼成：普通 色調：暗灰色 玄室出土。
横 穴 墓	甌	2-3		底部は平らで、外傾しながら体部にいたる。 底部内面に2本の凸線をもつ。	底部外面ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 底部から体部にかけて少残存。 前庭堆積土出土。
	広口壺	2-4 30-12	口径：8.7 器高：14.5 体部最大径： 13.6	垂直にのびる頸部は比較的長く、口縁部は、端部がやや鋸い。短く弓形状を呈する肩部と体部との間に、最大径をもつ。 底部は丸く、弓形状を呈する。	底部から体部下半にかけての外面は、ヘラ削り。 底部内面は、指ナデ。 他は回転ナデ。調整ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 2mm程度の砂粒 を少量含む。 焼成：普通 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋 坏 (身)	2-5 30-10	口径：10.0 器高：4.85 受部径：14.7	内傾する立ち上り部は、端部がやや内湾して鋸い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部が丸く、立ち上り部との境に1条の沈線をもつ。 底盤は丸く、やや深い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。

図版9

器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
4 号 横 穴 基	蓋 环 (身) 2 - 6 30 - 11	口径： 11.4 器高： 4.0 受部径： 14.35	内傾する立ち上り部 は、端部がやや鋭い。 斜め上方に短かくの びる受け部は、端部 を丸くおさめる。 底部外面と口縁部と の境に浅い凹線をも つ。 底部は丸く浅い。	底部外面は、ヘラ切 り後粗い指ナデ。 内面は不定方向の指 ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗で黒 色タールと石英 を含む。 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。 外面の一部に自然 釉付着。
	蓋 环 (身) 2 - 7	受部径： 13.5 (推定)	立ち上り部は内傾す る。 受部は、やや斜め上 方にのび、端部を丸く おさめて底部につ ながる。 底体部との境に、指 による浅い凹線をも つ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：普通 色調：灰色 口縁部のみ少存。 前庭堆積土出土。
	蓋 环 (身) 2 - 8	口径： 9.6 (推定) 受部径： 12.3 (推定)	内傾する立ち上り部 は、端部が鋭い。 受部はほぼ水平にの び、端部を丸くおさ める。 底体部との境に指に による浅い凹線をも つ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 口縁部のみ少存。 前庭堆積土出土。
	甌 2 - 9		頸部はやや外反する。 肩部はやや斜めになる。 器厚は薄い。	頸部は回転ナデ。 肩部外面は、タタキ 目。内面にあて木目 が残る。	胎土：密 3 mm以下の白色 砂粒を含む。 焼成：普通 色調：暗青灰色 頸部から肩部を中心 に破片でわずかに残る。 前庭堆積土出土。
	甌 2 - 10	口径： 14.2 (推定)	外反する口縁部は、 端部を丸くおさめる。 頸部との境に1条の 凸線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 口縁部のみ少存。 前庭堆積土出土。
	提 瓶 2 - 11 30 - 13	口径： 6.3 器高： 19.8 体部最大径： 13.8	やや外反してのびる 頸部に、内窓する口 縁部がつづき、端部 はやや鋭い。 体部から底部にかけ て珠状を呈し、体部 中央で、最大径をな す。 肩部に乳頭状の耳が 1対とりつく。	体部の片面は、ヘラ 削り後、回転ナデ。 他面は、回転ナデ。 頸部は回転ナデ。	胎土：やや粗 石英、長石を含 む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。

図版10

器種	図版番号 写真番号	法 器	形 態	技 法	備 考
蓋 壺 (蓋)	3-1	口径: 12.2 (推定)	口縁端部は丸く、ゆるやかに内傾しながら天井部に至る。 口縁部と天井部の境に幅1mmの浅い沈線をもつ。	回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 口縁部のみ焼成残存。 前庭埋積土出土。
5 号 構 穴 番	蓋 壺 (蓋) 3-2 31-1	口径: 13.4 器高: 5.8	外折がりにのび、端部を丸くおさめた口縁部と丸みをおびた天井部との境は、明瞭でない。 器高は高い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土: 密 黒色タールを含む。 焼成: 良好 色調: 噴灰色 玄室出土。 外面の一部に自然釉付着。
蓋 壺 (蓋) 3-3 31-2	口径: 11.5 器高: 4.4	垂れにのび、端部を丸くおさめた口縁部の内面には、1条の沈線を有する。 丸みをおびた天井部と口縁部の境は明瞭ではない。 器高はやや低い。 内面は口縁部に浅い沈線を有す。中心から外へ3cm附近が最厚8mmである。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 後に板状のもので、引っかけている。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土: 密 4mmほどの妙粒を少量含む。 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。 外面全体に自然釉付着。	
蓋 壺 (蓋) 3-4 31-3	口径: 11.5 器高: 3.96	やや外折がりにのび、端部をやや鋸くした口縁部と丸みをおびた天井部との境に1条の太い凹線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰色 前庭出土。	
蓋 壺 (蓋) 3-5 31-4	口径: 11.1 器高: 3.85	外折がりにのび、端部を丸くおさめた口縁部と、くぼみをおびた天井部との境は明瞭でない。 器高はやや低い。	天井部外面の2/3はヘラ削り。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土。	
蓋 壺 (蓋) 3-6 31-5	口径: 9.9 器高: 4.05	垂れにのび、端部を丸くおさめた口縁部と、くぼみをおびた天井部との内面の境に凹線を有す。 器高はやや低い。 最大器厚は、中心から外へ2cm前後で9mmとなる。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面はていねいな指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土。 外面の一部に自然釉付着。	

	器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
5 号	蓋	3-7 31-6	口径：9.9 器高：3.8	やや外折りに長くのび、端部をやや鋸くおさめた口縁部の内面に1条の浅い凹線を有し、外面は肥厚する。丸みをおびた天井部と口縁部との境は、かすかな稜線をもつ。器高はやや低い。	天井部外面はへラ削り。内面は、不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：やや粗 黒色タール多数付着。 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。
	蓋 环 (蓋)	3-8 31-7	口径：10.4 器高：3.8	外折りにのび、端部をやや丸くおさめた口縁部の内面に、浅い凹線を1条有す。丸みをおびた天井と口縁部との境は、かすかな稜線をもつ。器高はやや低い。	天井部外面はへラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。内面は指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：やや粗 黒色タール多数付着。 焼成：普通 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋 环 (身)	3-9 31-8	口径：10.55 器高：4.0 受部径：12.8	内傾する立ち上り部は、端部がやや続い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面へラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面全体に自然釉付着。
	蓋 环 (身)	3-10 31-9	口径：9.8 器高：4.1 受部径：12.4	内傾する短かい立ち上り部は、端部がやや続い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面はへラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。内面は一定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋 环 (身)	3-11 31-10	口径：9.55 器高：3.5 受部径：12.4	内傾する立ち上り部は、非常に短かく、端部はやや続い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はへラ切り後、不定方向の指ナデ。板状のもので引っかいた痕跡がある。内面は指ナデ。他は回転ナデ。	胎土：密 黒色砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面に「ノ」のへラ記号あり。
	蓋 环 (身)	3-12 31-11	口径：9.4 器高：3.75 受部径：11.7	内傾する立ち上り部は、非常に短かく、端部は、やや続い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面はへラ切り後、粗い指ナデ。内面は指ナデ調査。他は回転ナデ。ロクロは左回転	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面の部分に茶色のサビ付着

器種	測定番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
蓋杯 (身)	3-13 31-12	口径: 9.2 器高: 3.25 受部径: 11.6	内傾する立ち上り部は非常に短かく端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。 底部に弓状を呈し、器高は低い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。 クロロは右回転。 板状のもので引っかいた痕跡がある。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土。
	3-14 31-13	口径: 8.7 器高: 4.0 受部径: 11.2	内傾する極端に短い立ち上り部は、つまみ出した程度で、やや斜め上方にのびる受け部より低い。 底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面は、ヘラ切り後指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。 内面に「×」のヘラ記号あり。 外側全体に自然釉付着。
	3-15 31-14	口径: 8.8 器高: 3.65 受部径: 11.2	内傾する短かい立ち上り部は、端部が鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。 底部は丸く器高は低い。	底部外面は、ヘラ切り後ナデ調整するが凸が残り、調整が悪い。 内面は一定方向の指ナデ。	胎土: やや粗 黒色タールを少量含む。 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 玄室出土。 外側に「/」のヘラ記号あり。
横 蓋杯 (身)	3-16	口径: 9.2 器高: 3.35 受部径: 10.3	内傾する極端に短かい立ち上り部は、つまみ出した程度で、端部は鋭い。 やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。 底部は、弓状を呈し器高は低い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面は回転ナデ調整。 他は回転ナデ。 クロロは右回転。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。 内面に「×」のヘラ記号あり。
	小形 高杯 3-17 31-15	口径: 8.6 器高: 5.4 受部径: 5.6	外張りにのびる杯部の口縁端部は、やや鋭い。 低く短かい脚部、下半は「ハ」の字状に拡がり、端部は面を有す。	杯部底部外面は、ヘラ削り。 底部内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 クロロは右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。
蓋 基 小形 高杯	3-18 31-16	口径: 8.6 器高: 4.5 受部径: 5.1	外張りにのびる杯部の口縁端部は丸みをもつ。 脚部は「ハ」の字状に直接杯部底部にとりつき、端部はやや鋭い。	杯部底部外面は、ヘラ削り後回転ナデ調整。 底部内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土: 密 砂粒を含む。 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。

器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
高 环	3-19	底部径：9.6 (推定)	短脚で外面は底端部より内傾する面をもつ。 内面は内尚する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 燒成：良好 色調：灰色 腳部%残存。 前庭堆積土出土。
5 長頸壺	3-20 31-18	口径：7.2 器高：16.6 体部最大径： 13.0	やや外傾してのびる 頸部は反く、内傾する 口縁端部はやや焼 短く弓状を呈する 肩部と体部との間に 最大径がある。 底部は丸みをもつ。	体部下半から底面に かけてヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 燒成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
号 平 瓶	4-1 31-17	口径：6.5 器高：14.45 体部最大径： 14.0	やや外傾してのびる 頸部は、やや短い。 内傾する口縁部は、 丸みをおびている。 内面に3条の沈線を 有す頸部は、肩部の 中心よりやや横にと りつく。 2つの竹管状のくぼ みをもつ肩部と体部 の間に最大径がある。 底部は丸みをもつ。	体部下半から底部に かけてヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 3mm以下の砂粒 を含む。 燒成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
横 台付 环身 (土器質) 土 器	4-2	口径：15.3 (推定) 器高：4.5	低い台から外傾しながら口縁部にいたる。 口縁端部は丸みをお びている。 底部にわずかながら 3条の縦が認めら れる。	底部内面は仕上げナ デ。他は回転ナデ。 底部に静止糸切り痕 を残す。 ロクロ回転方向不明。	胎土：2mm以下の 砂粒を含む。 燒成：普通 色調：赤黄色 少残存。 前庭堆積土出土。
穴 台付 环身 (土器質) 土 器	4-3	口径：17.3 (推定)	口縁端部は丸く、や や外反しながら口縁 部に続く。 口縁部には4条の指 による凹縫が認めら れる。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 燒成：普通 色調：赤色 口縁部のみ%残存。 前庭堆積土出土。
臺 提 瓶	4-6 30-4	口径：13.8 体部最大径： 25.0	大型で、口縁部は2 重口縁で、耳は片方 しか残っていない。 体部は耳のつく方向 に長い。	口縁・口縁部は内外 とも回転ナデ。 胴部外面は、両面とも カキ目(片面170 ~190条)。 内面は張り付け痕が 円形に残る。 片面はあて木目(同 心円文)が残る。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 3mm以下の砂粒 を含む。 燒成：やや不良 色調：淡黄灰色 少残存。 前庭堆積土出土。

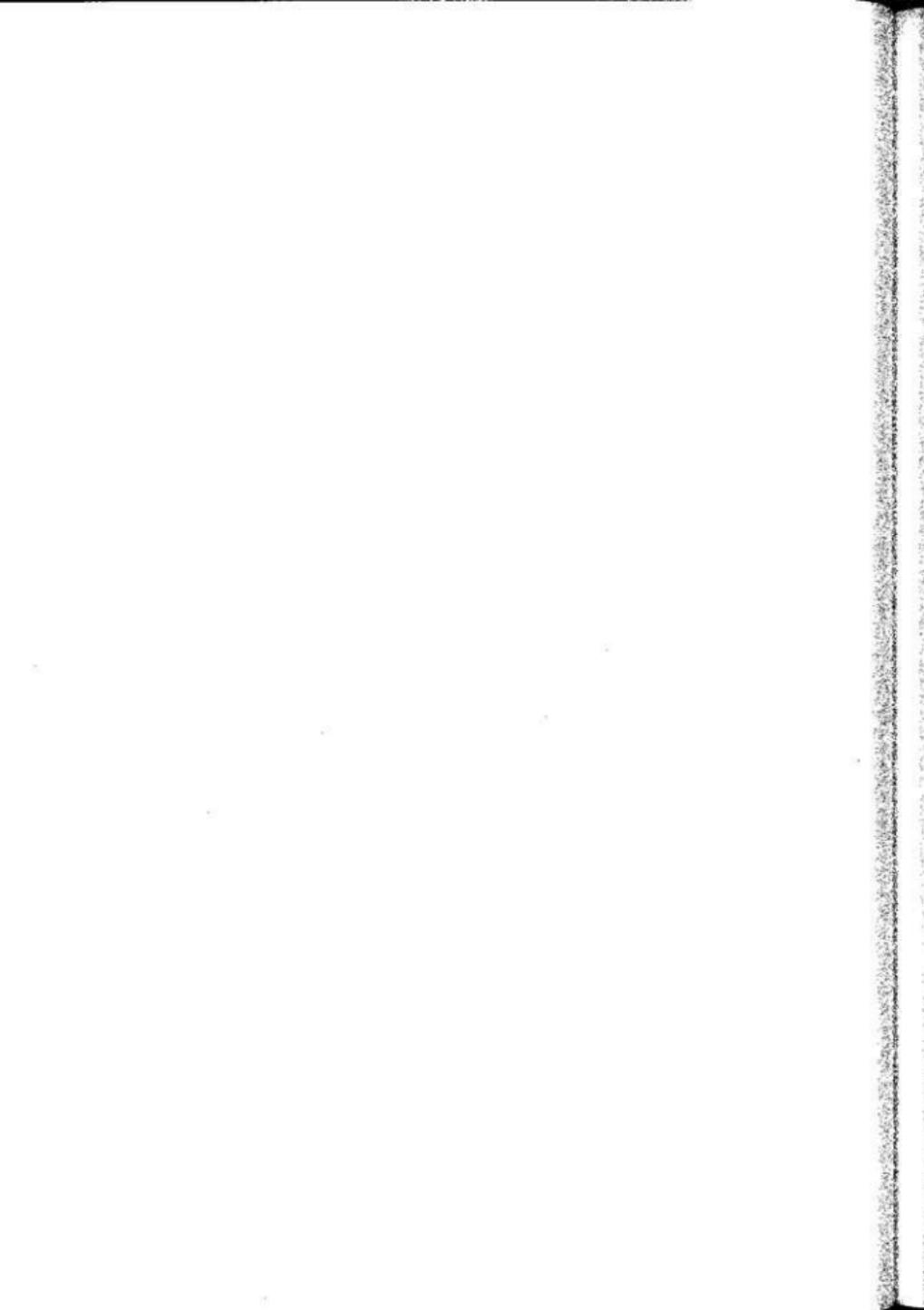
図版14

器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
蓋杯 (蓋)	5-1	口径：11.85 (推定) 器高：3.4 (推定)	大形で口縁端部はやや丸みをもち、内側に幅2mmの沈線1条をもつ。 「口縁部は矮く立ち上がり、天井部に至る天井部との境に幅2mmの沈線をもつ。 天井部はほぼ平たい。	天井部外面へラ切り後、粗いナデ。 内面不定方向の指ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：黄灰色 劣残存。 前庭堆積土出土。
	5-2 32-1	口径：13.0 器高：4.3	外拵がりて、端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部との境にかすかに稜線をもつ。 天井部の中程には1条の凹線がラセン状に入る。 器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗 4mm以下の砂粒を少量含む。 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土。
横	5-3 32-2	口径：12.7 器高：4.1	やや外拵がりてのび端部を丸くおさめた口縁部と、弓状を呈し、中心部がやや平らな天井部との境にわずかな稜線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後木製盤。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。
穴	5-4 32-3	口径：12.9 器高：4.1	外拵がりて端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部との境は不明瞭である。 天井部中央は平らである。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は一定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：普通 色調：淡赤灰色 玄室出土。 天井部外面に「×」のヘラ記号あり。
底	5-5 32-4	口径：12.2 器高：3.8	外拵がりて、端部を丸くおさめた口縁部の内面に1条の沈線をもつ。 天井部は丸みをおび口縁部との境に2条の凹線が入る。 器高は低い。	天井部外面はヘラ切り後、指ナデ。 天井部内面は、一定方向のナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。

	器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
6 号	広口壺	5-7 32-11	口径： 9.35 器高： 13.65 体部最大径： 12.6	やや外反する頸部は比較的長く、口縁部は内傾して、端部は丸みをもつ。肩部は短かく体部との間に最大径をもつ。底部はやや平らである。	底部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。内面は指頭圧調査。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：やや粗 4mm以下の砂粒 を含む。 焼成：普通 色調：淡黄灰色 矣出土。 肩部から頸部にかけて一部自然釉付着。
	蓋杯 (身)	5-8 32-6	口径： 11.0 器高： 3.15 受部径： 13.3	内傾する立ち上り部は、やや短く、端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを微 量に含む。 焼成：普通 色調：灰色 玄空出土。
	蓋杯 (身)	5-9 32-7	口径： 11.05 器高： 4.0 受部径： 13.6	内傾する立ち上り部は、端部がやや鋭い。受け部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめている。底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、丁寧な指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：やや粗 4mm以下の砂粒 を含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄空出土。
横 穴	蓋杯 (身)	5-10 32-8	口径： 10.9 器高： 3.55 受部径： 13.6	内傾する立ち上り部は、やや短く、端部は鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後、指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 玄空出土。
	蓋杯 (身)	5-11 32-9	口径： 10.75 器高： 3.95 受部径： 13.35	内傾する立ち上り部は、端部がやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は丸みがある。底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、粗い指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを少 量含む。 焼成：良好 色調：灰色 矣空出土。 外面に自然釉が一部に付着。
蓋 基	蓋杯 (身)	5-12 32-10	口径： 9.55 器高： 4.0 受部径： 12.3	内傾する立ち上り部は、端部がやや外反して鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。底部は丸みがあり、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは右回転。	胎土：密 黑色タールを含 む。 焼成：良好 色調：青灰色 玄空出土。 全体に歪んでいる。

図版16

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
6 号	小壺	5-13		頸部から肩部にかけて、逆「く」の字形になり体部にいたる。体部はやや内湾する。	頸部から肩部回転ナデ。体部へラ削り。ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 肩部から体部が残存。 前庭堆積土出土。
横 穴 墓	瓶	5-14		肩部は外傾し、体部にいたる。体部に2条の沈線がある。底部は平らである。	底部外面へラ切り後ナデ仕上げ。底は回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：密 3mm以下の白砂 粒含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 肩部から底部が残存。 前庭堆積土出土。
7 号	蓋杯 (蓋)	5-23 32-13	口径：9.8 器高：3.4	外折りで肩部を丸くおさめた口縁部と丸みをおびた天井部との境に、指による凹線をもつ。器高は低い。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 天井部内面は、指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 外面に油脂付着。 玄窓出土。
横 穴 墓	蓋杯 (身)	5-24 32-14	口径：8.9 器高：3.2 受部径：11.2	内傾する細い立ち上がり部は端部が丸い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめ、立ち上がり部と受け部との高さの違いは、極くわずかである。 円状を呈する底部はやや丸みをもつ。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 外面に油脂付着。 玄窓出土。
泉	蓋杯 (蓋)	5-25 32-12		環状のつまみがつき天井部はやや内湾する。器厚は厚い。	天井外面へラ削り。内面は不定方向仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗青灰色 つまみと天井部が残存。 前庭堆積土出土。





平野遺跡群周辺の航空写真 (1平野西横穴墓群、2平野東横穴墓群)  
(3~5高野田塚地、6・7平野古墳) 南より



平野横穴墓西支群近景



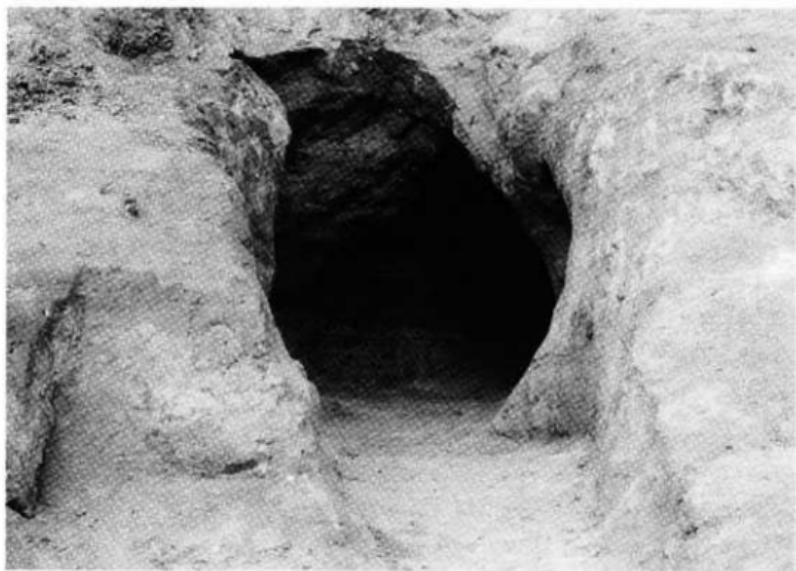
1号横穴墓羨門閉塞状況（東から）



1号横穴墓前景（東から）



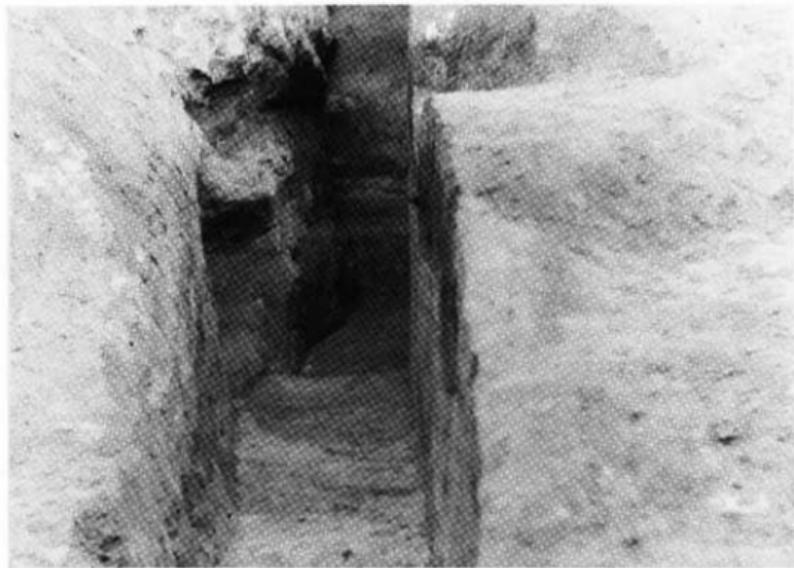
2号横穴墓玄室堆積土層（東から）



2号横穴墓前景（東から）



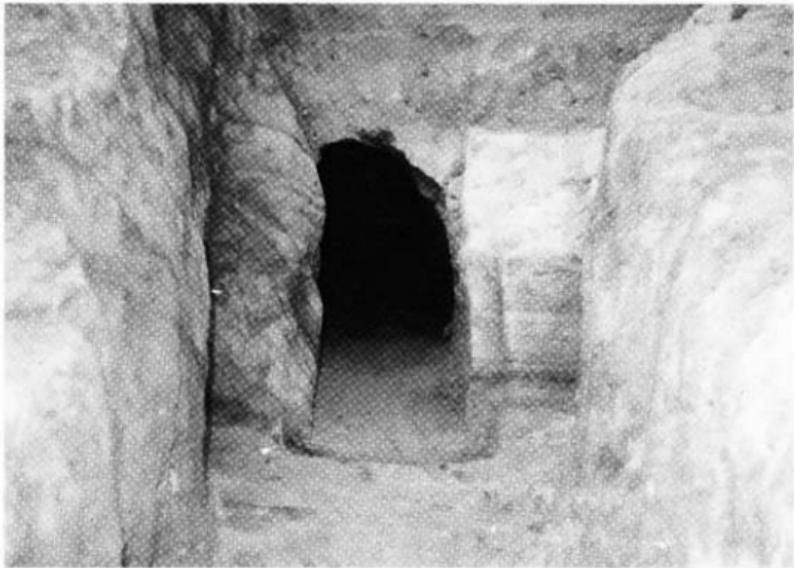
3号横穴墓造構検出状況(南から)



3号横穴墓前庭部(東から)



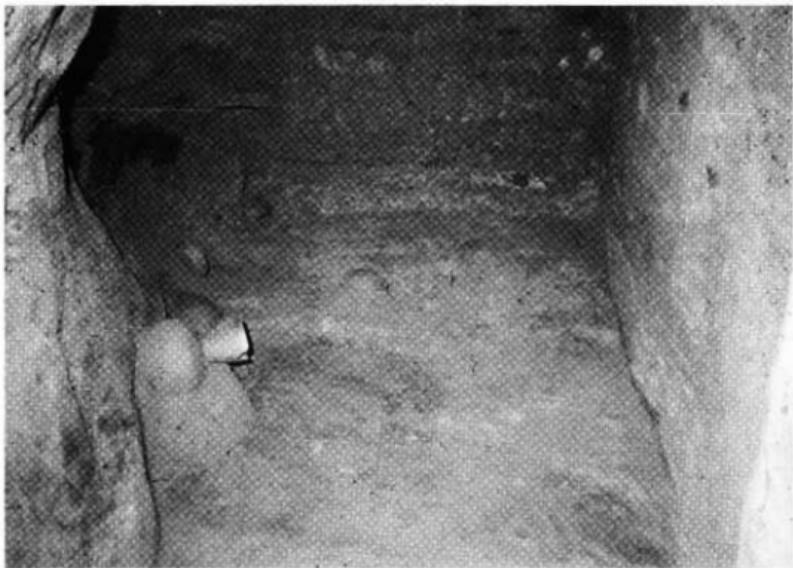
4号横穴墓遺構検出状況(東から)



4号横穴墓前景(東から)



5号横穴墓羨道堆積土層（東から）



5号横穴墓遺物出土状況（玄室南壁、東から）



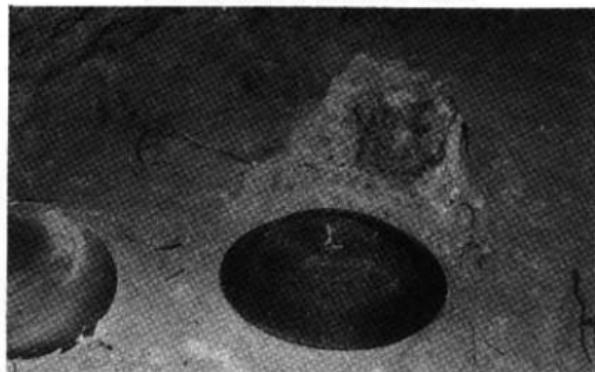
6号横穴墓前庭堆積土層(東から)



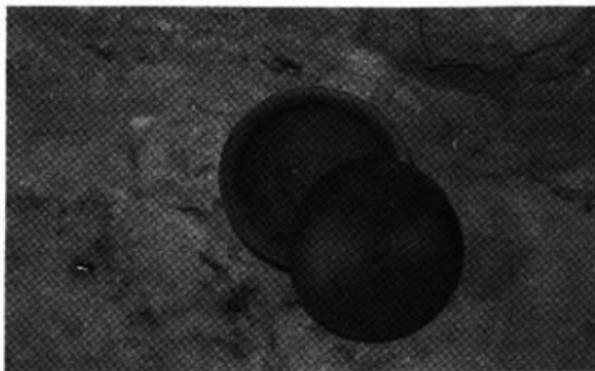
6号横穴墓羨門閉塞状況(東から)



6号横穴墓遺物出土状況（玄室から表道）



6号横穴墓人骨及び遺物出土状況（玄室奥）



6号横穴墓遺物出土状況（左前壁ぎわ）



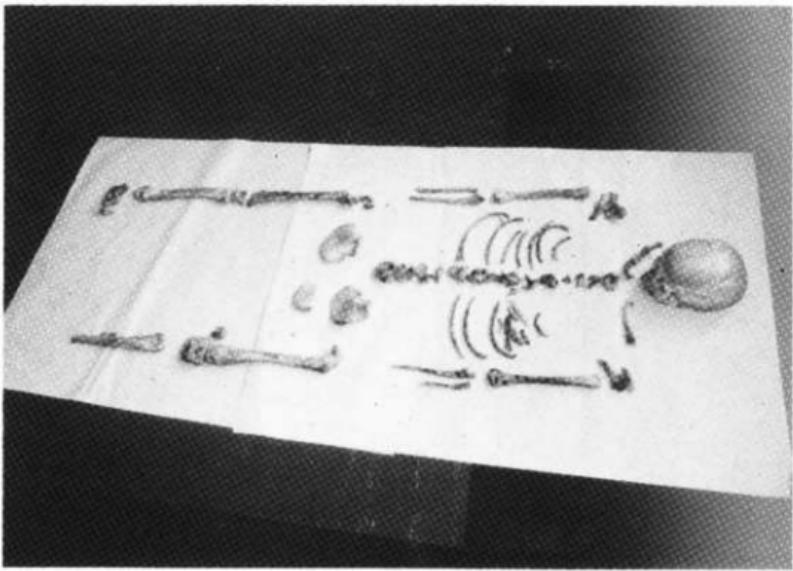
7号横穴墓羨門閉塞状況(東から)



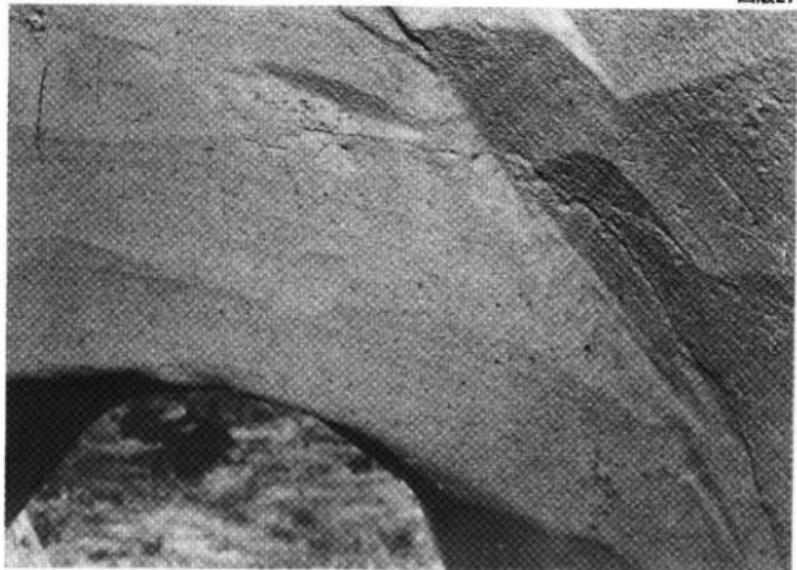
7号横穴墓前景(東から)



7号横穴墓人骨出土状況(東から)



7号横穴墓出土人骨



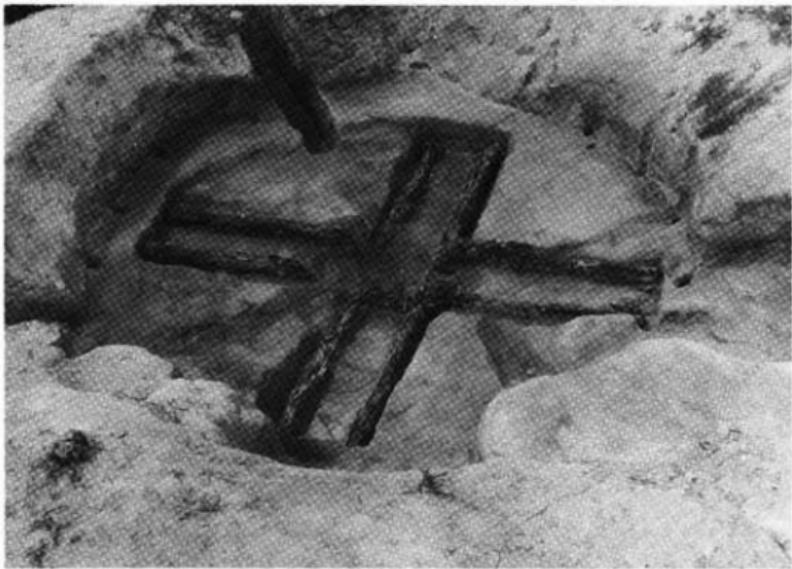
7号横穴墓玄室加工状況(右前)



7号横穴墓玄室加工状況(左奥)



第7号高射砲陣地（発掘前）



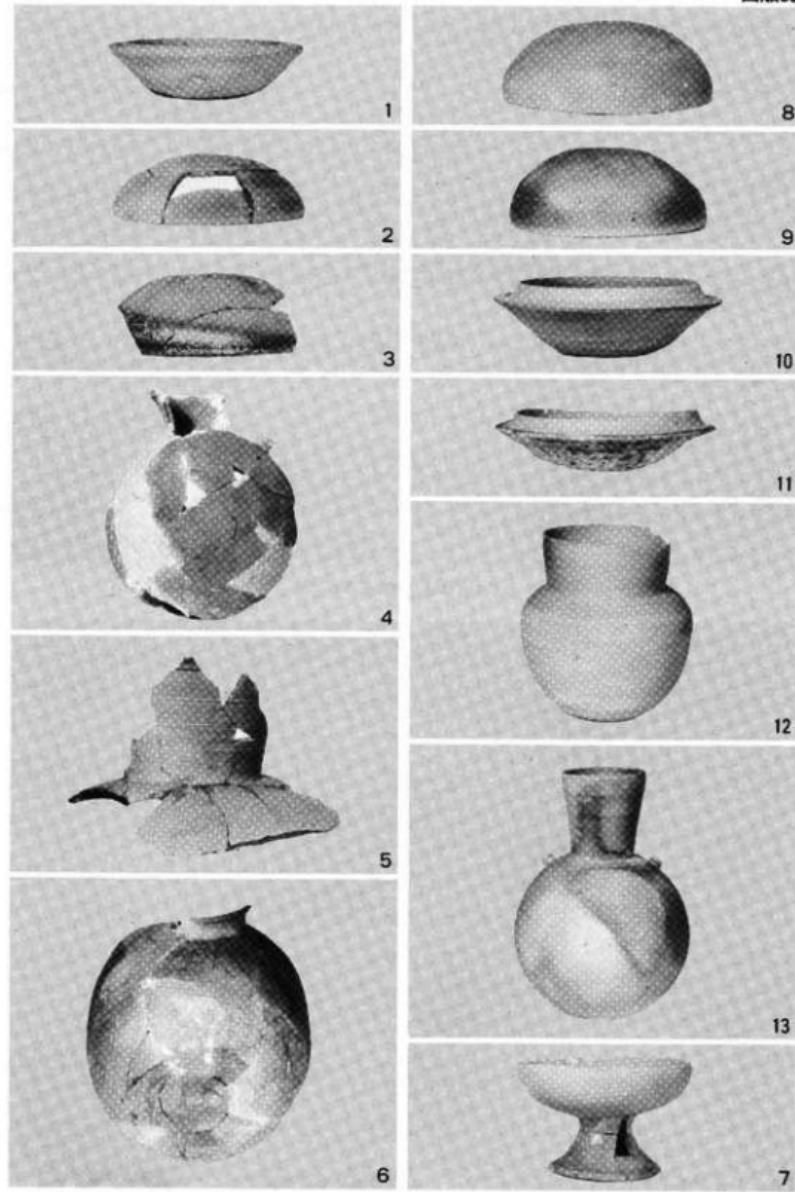
第7号高射砲陣地（発掘後）



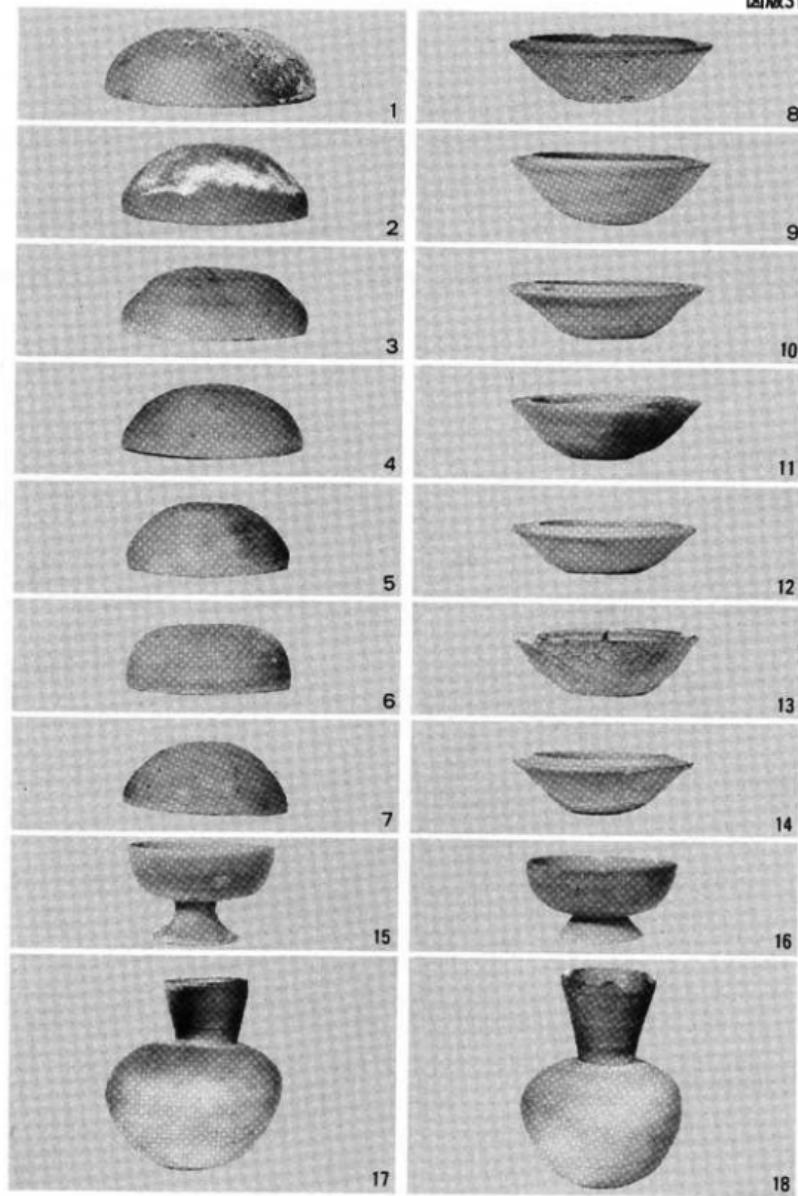
間隔排水口（西より）



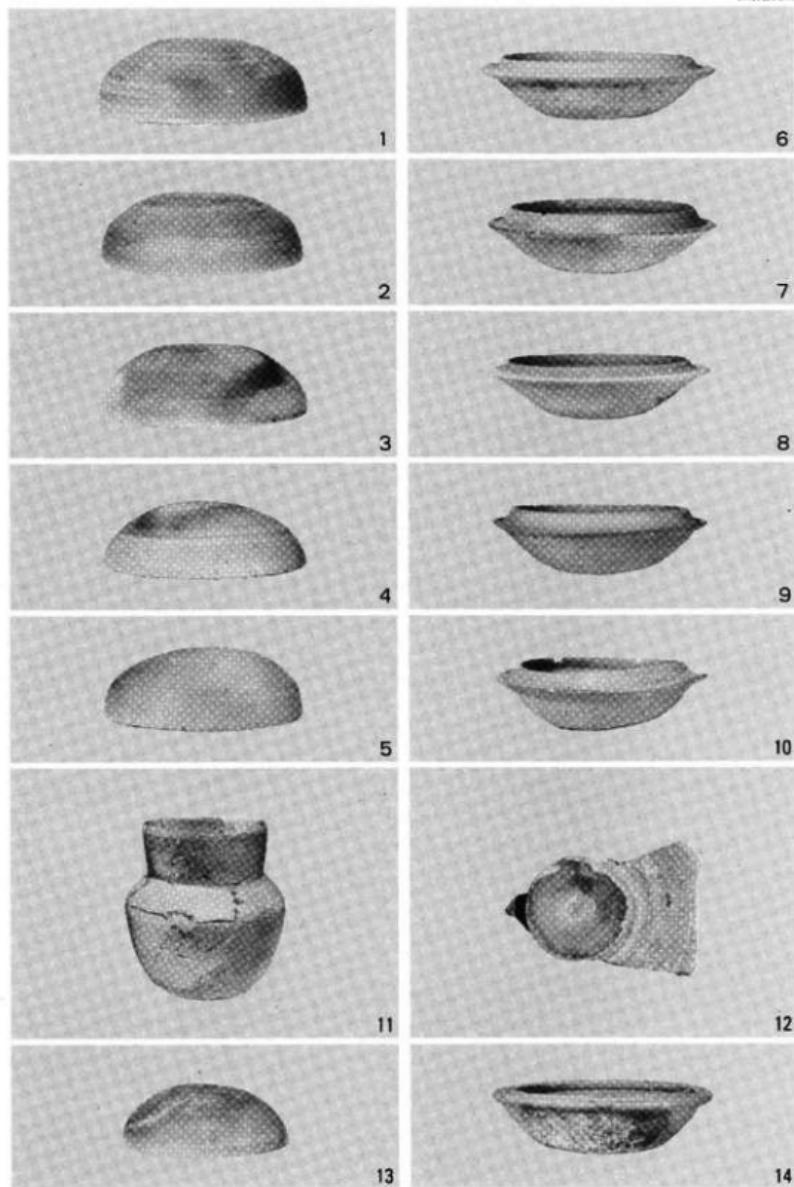
間隔排水口（東より）



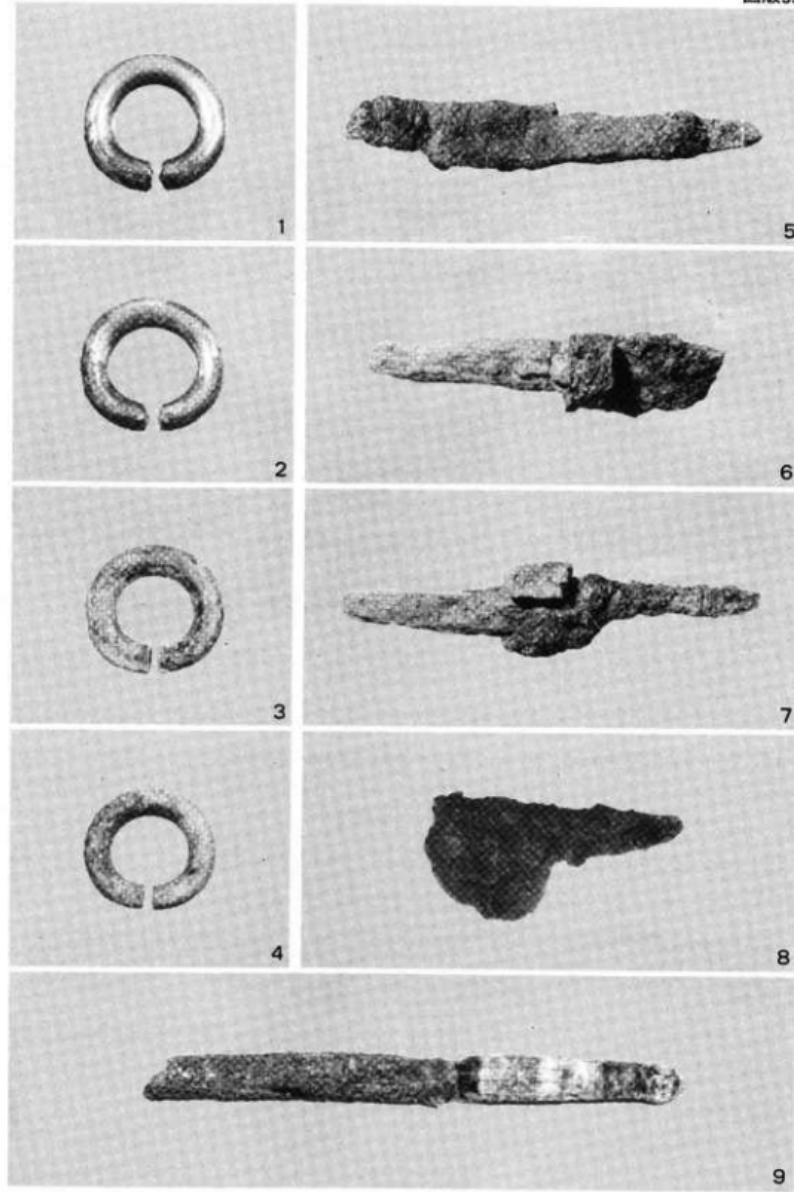
1号(1)、2号(2.3)、3号(5~7)、4号(8~13)、5号(4)横穴墓出土遗物



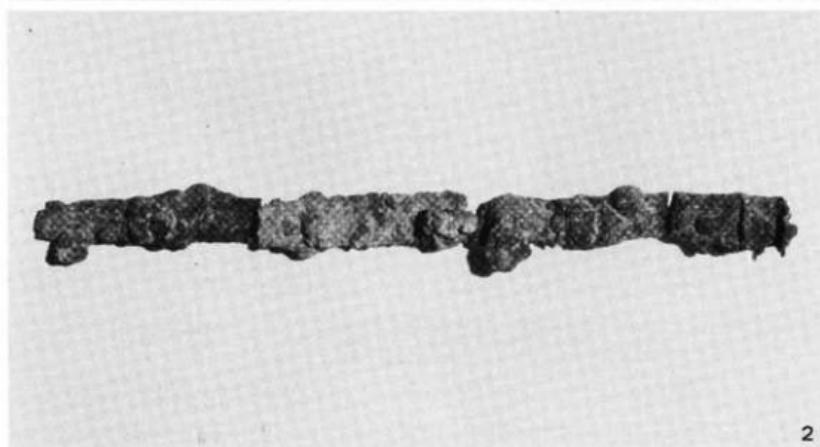
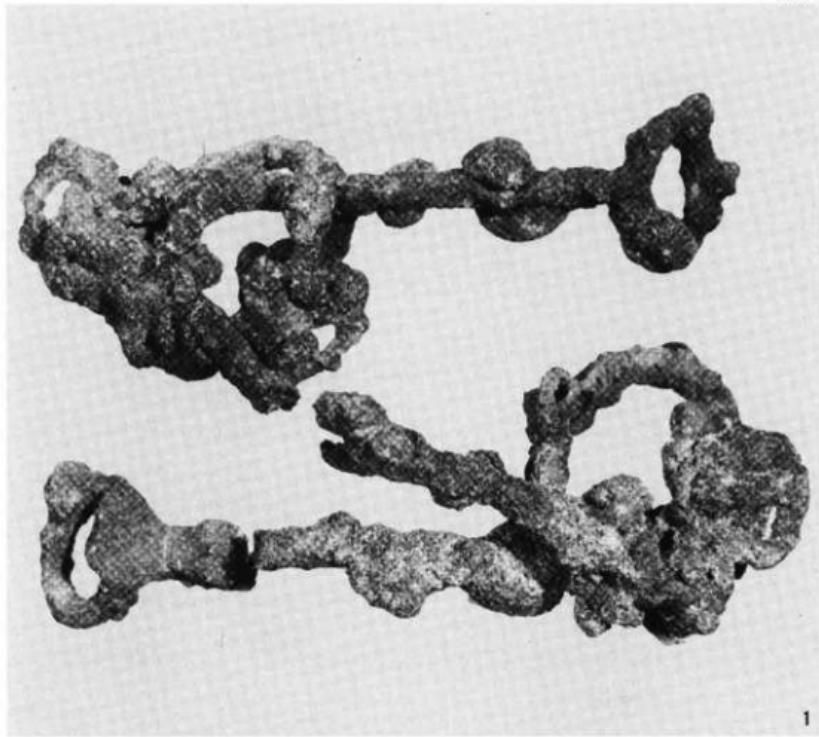
5号横穴墓出土遺物



6号(1~11)、7号(12~14)横穴墓出土遺物



6号(1~8)、4号(9) 横穴墓出土遺物



5号横穴出土遺物（1は馬具、2は直刀）

---

## 平野遺跡群発掘調査報告書 I

1983年3月

発行 島根県簸川郡斐川町  
斐川町教育委員会

印刷 島根県簸川郡斐川町  
島根印刷株式会社  
TEL(08536)3-3500

---